

# 『ざつとむかし（第三集）』

―採訪を終えて―

福島県南会津郡南郷村の民話

福島県南会津郡伊南村の民話

福島県南会津郡舘岩村の民話

千葉大学日本文化研究会

民話分科会

本書は、一九七四年（昭和四九年）十一月一日に発行された手書き謄写版刷りの民俗調査報告書『ざつとむかし（第三集）』（福島県南会津郡南郷村・伊南村・舘岩村の民話）をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

南郷村を中心とした地域の民話集は、三回の民話採訪調査で全四冊を発行し、本書は三冊目にあたります。

本書は、明らかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、および句読点の位置の変更等をおこなっています。また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

## はじめに

竹谷寿々代

八月十四日、昼、郵便局の局長さんから今日は盆踊りがあるというので、夜出かけた。田んぼの中の一本道を懐中電燈で照らしながら歩く。

ほたるがいた。この水は甘いのかな。

道のあちこちに月見草の花が咲いていた。今夜は月は出ていないのに。

途中、鎮守の森が恐ろしい。

この辺は狐が出るそう。なかなか着かないのは化かされていっているのだろうか。

やっと太鼓の音が聞こえてきた。

真中にやぐら、そのまわりにぐるりひとまわりの円。一杯機嫌のおじさんが踊りを教えてくれた。とても簡単な踊りだった。いつまでもいつまでも続く踊りだった。

歌の文句を聞き取ろうと思ったがどうしてもわからなかった。歌っている人はとてもいい声だ。でも何だかちよつと寂しい感じがした。人が少なかったせいだろうか。

翌日、バスを降りると、道ぞいにずっと民家がならんでいた。そのほとんどが曲家まがりやである。どの家の庭も花でいっぱいだった。大部分の家の前に畳二畳ぐらいの四角い池があった。何のための池だろう。そんなことを考えながら道を歩いていく。

伊南村白沢……静かな水の豊かな村である。巾五十センチぐらいの小さな流れがそこにある。そのすきとおった水の底に、底のこげたなべや皿がつけてあったりした。

途中、ふと出会ったお地藏様。誰がどんな願いをかけたのだろうか、色あせた赤い布きれが首にぶらさがっていた。村を流れる伊南川。昔は、雪どけの水を利用して新潟まで材木を流した。今は鮎釣りのシーズンで、釣り人が腰まで水につかりながら鮎を釣っていた。その川にかかっている倭橋やまとはし。わたしたちは橋に一番近い家に入った。

「ごめんください。あのー、ボクたち、ザットムカシを聞きたくてやってきたんですけど・・・」

お盆で家の中はにぎやかだった。おぜんをかこんで話をしていた人たちが一斉にこっちを向く。

「まあまあ、あがってくんつえ」

では、失礼してと上がりこむ。この暑いのにしきりに座布団をすすめてくれる。もうとうに八十を超したようなおばあちゃんが、自分で煮つけたうま煮をお皿によそって出してくれた。それからゴソゴソと戸棚をかきまわして、缶入りのおせんべいを持ってきてくれた。

このおばあちゃんから狐に化かされた話や狐つきの話、化け物の話を聞く。なんでもおばあちゃんのおばさんにあたる人が狐に取りつかれたのだという。

午後、バス停近くの家に入る。昔話を聞かせて欲しいと頼んだが、もう忘れてしまったと言つてなかなか口を開いてくれない。幸い娘さんがお盆で里帰りしていて、あれこれとおばあちゃんの記憶をひっぱり出してくれた。驚いた

ことに、田沢湖の伝説を話してくれた。それも、この話はおばあちゃんの祖母にあたる人が話してくれたのだそうだ。安政生まれの人が、どうしてこの伝説を知ったのだろうか。ごぜから聞いたのか、それとも旅人からだろうか。

甘いとうもろこしをかじりながらおばあちゃんの話聞く。(それにしてもこのとうもろこし、どうしてこんなに甘いんだろう。)

ふと上を見ると自在鉤が引き上げてあった。いろいろ冬のことが想像される。

「冬は寂しいでしょう?」

冬は雪がのきまでつもる。だから冬は仕事が少ない。女の人は、昔は麻をつむいだ。家の前のあの畳二畳ぐらいの池は麻をつけた池なのだそうだ。仕事がないから冬になると近所の人が誘いあつて集まり、水あめなんぞ食べながらいろいろのまわりで雑談するとおばあちゃんは言う。

もち米で水あめを作ると聞いてびっくり。知らなかった。わたしが驚いたので、おばあちゃんは太った体をもつそり

とおこして、台所の奥から瓶に入った水あめを持ってきて、はしの先からみつけてくれた。熟れすぎた柿のような色、きれいな色だ。なめるとさっぱりとした甘さだった。

おみやげにとうもろこしをもらって帰る。

ここには狐がいた。天狗がいた。大蛇がいた。それらがいともちつとも不思議ではなかった。

帰りのバス。窓から入ってくる風はかすかに秋の匂いがした。

【もくじ】

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・二

「ぎつとむかし」採訪の地について・・・・・・・・七

南郷村・伊南村・館岩村の民話 カッコ内は採話地区名・一六

「団子むかし」(南郷村・鶺鴒)・・・・・・・・一六

「食わず女房」(伊南村・大桃)・・・・・・・・一六

「勝々山」(南郷村・鶺鴒)・・・・・・・・一八

「猿むかし」(伊南村・大桃)・・・・・・・・二〇

「三枚のお札」(採話地区名不明)・・・・・・・・二二

「鳥呑み爺」(南郷村・和泉田)・・・・・・・・二四

「柳長者と松長者」(館岩村・湯の岐)・・・・・・・・二六

「和尚さんの話」(伊南村・大原)・・・・・・・・二九

「姥の皮」(伊南村・大原)・・・・・・・・三〇

「化け物に食べられた話」(伊南村・白沢)・・・・・・・・三二

「きのこの化け物の話」(南郷村・和泉田乙沢)・・・・・・・・三三

「貧乏神」(南郷村・和泉田乙沢)・・・・・・・・三六

「願い事のかなう臼の話」(館岩村・塩ノ原)・・・・・・・・三七

「蛇むかし」(伊南村・大桃)・・・・・・・・三九

「きつねに化かされた話」(伊南村・白沢)・・・・・・・・四〇

「田沢湖の伝説」(伊南村・白沢)・・・・・・・・四二

「前沢の杉の木の話」(館岩村・塩ノ原)・・・・・・・・四三

「大原の鍾乳洞」(採話地区名不明)・・・・・・・・四三

「長田の醤油屋の嫁と姑の話」(伊南村・宮沢)・・・・・・・・四四

「明け六つ暮れ六つのおこり」(南郷村・和泉田)・・・・・・・・四七

「天狗にさらわれた話」(伊南村・大桃)・・・・・・・・四九

「子安地蔵のいわれ」(採話地区名不明)・・・・・・・・四九

「塩清水の由来」(館岩村・塩ノ原)・・・・・・・・五〇

「沼の主の話」(館岩村・塩ノ原)・・・・・・・・五〇

南郷村・伊南村・館岩村の民話【話者名と題名】・・・・・・・・五三

【民話採訪調査を終えて】	五五
民話採集を終えて	五五
出会い	五七
採訪雑感	五九
御免ください	六二
南郷村合宿について	六五
むらの生活と民話	六六
手まりうた	六八
民話の世界	七一
はじめての夏合宿	七三
民話について思うこと	七五
サークルに入って	七六
日文研民話分科会と私	七七
昔話に思う	八四
合宿を終えて	八五
採訪初日	八六
民話の周辺―山の神と大蛇絵	八九

三度の南郷村訪問を終えて	九四
民話採訪の途中で（久川城址を歩く）	九八
民話分科会活動記録	一〇〇
民話採訪調査担当者一覧	一〇二

## 「ざつとむかし」 採訪の地について

永井英男・若林己千雄

私たちは昨年夏から一年間にわたって、のべ三回、民話を求めて南会津郡南郷村を訪れました。上野から会津若松まで東北本線に揺られて五時間あまり。そして会津線で二時間南下を続けると会津田島駅。ここまで来てもまだ南会津の東部に過ぎません。さらに西へ三十二キロメートル、標高一一三五メートルの駒止峠をバスがようやく漸くに上がり、下るとそこが南郷村です。

この峠は国道二八九号線の一環ですが、その険しさや冬の積雪のためからでしょうか、未だに全面舗装は施されていません。田島から南郷村へ入るには他にもう一つたていわ館岩村を経由する道があるのですが、これもまた中山峠という山越えをしなければなりません。

東京からこの地を訪れるもう一つの道には上野から四時

間余り、上越線小出駅で降りて、ディーゼル列車の只見線に乗り換えて、只見駅からバスで向かうという方法もあります。

南郷村は旧大宮村と旧富田村という二つの村が合併してできた村です。合併は昭和三〇年ということですので、南郷村の歴史はそれ程古いものではありません。しかし旧大宮村は一〇代崇神天皇の御代より柳川の庄として、また旧富田村は蒲生の庄として寺社領の支配下に治められていたという事実は、この村の生い立ちのなかなか古いことを示していると言えるでしょう。

この村は福島県の西南、南会津郡の西部のほぼ中央に位置し、東西一〇キロメートル、南北二三キロメートル、総面積一一九・八五平方キロメートルあります。山村の中央を南北に伊南川が流れ、そのV字状の河谷に東と中小屋という部落を除く、大小一二の集落が生活を展開しています。周囲を越後山系標高一三二四メートルの大博多山だいはたやまをはじめ、辰見山、大曾根山、戸屋山、それに伝説で名高い唐倉山からくらやま等一

〇〇〇メートル前後の山々が連なっている為に、地域面積の八三・八パーセントが山林原野で占められています。耕地はわずか五十四・七二ヘクタールと全面積の四・四パーセントにすぎず、耕地としては水田・普通の畑・桑畑が見られます。

村の下、すなわち伊南川の下流方に当たる界部落の北には鹿水川かみなみずがあり、この川の上流域に大字宮床みやとこの宮床湿原があります。海拔八三〇メートル、東西四二〇メートル、南北一七二メートル、面積約六・五ヘクタールの、皆さんも御存知の尾瀬を小さくしたようなこの湿原は、泥炭形成植物の発生する湿原として植物生態学上貴重な存在となっています。

南郷村は雪国です。その気候は裏日本型の気候に属し、年間平均気温も摂氏九・四度と決して高くはありません。真冬には氷点下一〇度以下にもなるということです。とりわけ特別豪雪地帯に指定されているために、降雪期間は、一〇月下旬から五月下旬までと長く、十一月下旬頃から根

雪となり、平均積雪量も二メートル近くあります。このような状態にあるために、春の融雪期は六月下旬まで続きます。

この豪雪は生活に大きな影響を及ぼしており、家屋でも、これに堪える為に独特の形の曲家中門造りが工夫されています。これは雪国独特の形式で、母屋の前の方の端にもうひとつ門をつけたチュウモンがあり、その中には牛や馬を飼育する厩・風呂、そしてトンボーといわれる大便所。シヨウベンシツパといわれる小便所などがあります。冬には家の周りが嚴重に雪囲されて、降り積もった雪と、屋根から降ろされた雪によって家の周りは全く閉鎖されてしましますが、このチュウモンの先端部の妻戸の所では雪おろしがされないのです、この所が唯一の出入口となります。

また雪に閉ざされた冬には貯蔵食料が大切な食源となります。特に野菜の保存は重要なものです。その保存法は、大根は、冬食べる分は洗って室に藁わらで囲っておき、春食べる分は藁わらニユウに保存しておきます。この藁わらニユウというの

は、畑を掘って二〇センチくらい土をあげ、その上に藁を敷き、大根を並べて丸く積んで、そのまわりを藁で囲い、雨水や雪の入らぬように包み、その上に藁が動かぬように石をのせておくものです。ネギ・ニンジン・ゴボウの類は洗って束にして箱や室に入れて、もみがらや藁で囲っておきます。じゃがいもはオメイと呼ばれる居間の炉のそばに室をつくり、もみがらで囲っておくか、または、かますに入れて天井に藁で囲っておきます。その他、柿は皮をむいて干柿にし、きのこ・わらび・ぜんまいなどは、塩漬か乾燥して保存します。最近では少なくなってきたということですが、「氷もち」とか「ヒシもち」という餅も作られます。これは餅を冷たい外気などにさらして氷らせ、軽石のような状態にして焼いて食べます。ちようど高野豆腐のような形に似ています。

南郷村の人口は四十九年四月一日現在、四三四三人で、これは、十年前に比べて千五百人以上の減少を示し、完全な過疎現象を示しています。他の過疎村同様、自然的増加

より社会的減少が大きい為で、ここも出稼ぎや若年労働者の都市への就職が増えています。現在、一世帯当たりの平均人口は四人に満たず、一平方キロメートル当たりの人口密度は三十六人前後となっています。産業別の就業人口を見ると、やはり第一次産業が半分を占め、ここでは農業従事者が大部分のようです。

実際のところ、南郷の生業というと主なるものは農業で、村の人々は農作物はすべて自給自足という生活を送っています。しかし農業も特別豪雪地帯のため、農作物の栽培は限られて、水稻、養蚕の複合経営が主体となっていました。農家一戸当たりの経営面積は六三・七アールと零細な規模に加えて、山村のため農地造成による規模拡大も難しく、年々農業以外の収入に依存する割合が強くなり、兼業化が進んでいます。一方、山間高冷地の特性を活かして、トマト・コンニャク、そしてビールの苦味にするホップなど収益の高い作物の奨励と近代化施設の導入を行って、技術の改善を進め、土地の効率的活用をはかり、農業所得の増加

を計っています。その他農作物として主なものには、米以外に蕎麦作りがあります。また、刈野かと呼ばれるいた焼畑は、人家や杉や松の森や桑畑の近くではできませんから、伊南川の沿岸から山裾へ、やがて山奥へと移動して行われていたということです。大豆は、やせ地でも発育するので、これも盛んに栽培されています。私たちも訪問した家でよく納豆を御馳走されました。

養蚕もこの地方では盛んに行われています。桑畑をよく見かけるのが、そのことを実証しているようでした。カイコの飼育の場所にはオメイという居間や座敷の畳をはがして蚕室としています。ここにハシゴ状のささえの棒を両側に立て、ホソキといって細い木を渡して何段かの棚を作って蚕座としています。現在では家の外にテントを立てて家の中では蚕を飼っていません。桑の葉は山の桑の木を使い、また山を焼き払って根ごしらえをした桑を植え付けて使用しました。この山桑は現在使われていませんが、今でもまだ各部落の急斜面の山腹に見ることができます。桑の特色

に雪害を防ぐため、二〜三メートルほどの桑の大木に成長させる点があります。(また根利用の桑園は藁で一メートルほどの桑の枝を隣の根元にゆわえて、雪折れを防いでいます。)この地方では繭まゆのことをメイと言いますが、メイをマブシ、これは藁を束ねて作り、よく成長した蚕を移し入れて繭を作らせるたよりとするものですが、マブシからとることをメイムシリといいます。そして、玉繭と屑繭を除いた繭を大きな袋に入れて出荷します。玉繭と屑繭は自分の家で真綿にしてふとんや綿入れなどを作ります。

私たちは南郷村を訪問したときに家畜を飼っている家をよく見かけました。いざ家に入ろうとするときに、入口にいる山羊やぎが「メエー」と一声鳴いてくれたときには、思わず心がなごみました。現在はすたれていますが、以前は馬の飼育が盛んだったようで、それは曲家の造りからも十分に察せられます。

林業もまたこの村の重要な産業の一つです。昔は建材や木工用材を伐採するだけでしたが、やがて、ある種の木を

選んで伐り倒し、河川を利用して流木をするようになりました。これをサナガシといいます。さらに自動車が出来ると、トラックで樵や檜の丸太がそのまま盛んに積み出されるようになって、山林はひとわたり伐り尽くされてしまいました。その為に近年は大掛かりな団地植林事業が実施されています。材木出しは「長材出し」又は「ボタ出し」ともいいます。ボタとは丸太の原木のことです。冬には雪の上をソリを使って運び出し、このときには特にバチゾリといつて前後に分けたソリを組み合わせて長い木材を運搬します。この姿は勇壮そのものです。

私たちは民話を求めて南郷村を訪れました。ではこの辺で、昔話とは一体どんなものなのだろうかということについて、少々お話ししましょう。

#### 〔昔話の形式〕

昔話は伝説や語り物などと同じく口から口へと語り継がれ聞き継がれてきた物語です。これらの物語を民俗学上の

用語で口承文芸と呼ぶのですが、この口承文芸は普通の作家の創作とは異なり、数多くの民衆の手によってつくりだされ語り継がれてきたものですから、昔話を初めとする口承文芸は庶民の知恵が結集されてできた素晴らしい耳の文学といえましょう。

昔話には地方によっていろいろな呼び方があります。たとえば東北地方では昔話のことを『むかしこ』と呼んでいるところもあります。岡山県では『むかしこっぶり』などと言うところもあるそうです。私達が訪れた南会津地方では『ざつとむかし』と呼ばれていました。ですから、私達が村のおばあさんなどに昔話を聞くとき、

「昔話を聞かせてください」

と言ったのでは通じません。

「ざつとむかしを聞かせてください」

と言いますと、おばあさんもすぐに納得して、

「ああ、ざつとむかしかよ」

と言って笑い顔を見せてくれるのです。

しかし私達が調査に不慣れだった頃には、昔話というと、昔の思い出話や村の古い出来事などと勘違いされて困ったこともありました。

昔話にはもともと一定の形式があつて、その形式に従つて語られるのが普通です。その形式の最も典型的なものは、『語り始めのことば』と『語り終わりのことば』でしょう。

この文句の内容も地方によっていろいろ変化があつておもしろいのですが、私達が訪れた南会津では『語り始めの言葉』は『ざっとむかしあつたと』とか『むかしむかし』となつていました。

鹿児島県の南にある黒島という島では、語りのはじめに、「さる昔ありしか無かりしか知らねども、あつたとして聞かねばならぬぞよ」と言うそうです。これは、『これから始まる話はうそか本当かしらなければいけれども、あつたこととして聞くのだぞ』という意味です。

『ざっとむかしあつたと』という言葉が昔話の語りはじ

めにつくのも、『この話は遠い祖先からの言い伝えだから、いい加減に聞くでないぞ』と聞き手に注意をうながしているのです。

語り終わりの言葉は、南会津では『いっちゃさけもうした』とか『いっちゃさけたぞ』と言います。『これでもうおしまい』という意味を含んだ言葉だと思われませんが、この言葉の語源については、いろいろな説があります。『一期栄えた』という説が最も有力で、『一生幸福に暮らしました。めでたしめでたし』という意味なのです。

主人公は、いろいろな苦難にあいながらも、結局は良いお嫁さんをもらつて豊かに暮らし、子どもにも恵まれて……ということになるわけです。

このようなところからも、日本人が幸福というものについて、どのように考えていたかがうかがえるようです。

しかし残念なことに、現在ではこのような語り始めの言葉や語り終わりの言葉をきちんと入れて語ってくれる人は少なくなつてしまいました。

また、話の内容にも一定の型があります。日本の昔話研究のバイブルともいえる、日本昔話名彙では完形昔話と派生昔話の二つに大きく分類した上で、さらに細かく分けていますので、その類は全部で三六〇ほどになっています。

#### 〔昔話を語る〕

南会津では、昔話は主にいろり端やこたつにあたりながら語られました。語り手はおじいさんやおばあさん、聞き手は大体子ども達です。私達がお話をうかがったおばあさんたちも、昔話を聞いたのは小学校にあがる前くらいまで、大きくなってからは、あまり聞かなかつたといえます。

南会津は非常に雪が深いために一年の半分近くを雪に閉じこめられています。雪に埋もれた山村の生活は、私達の想像以上に厳しいものでしょう。そんなとき、子ども達は、

「むかし、語りやれ、むかし聞かせやれ」

と言っでは、おばあさんやおじいさんにせがんだものだったのでしょうか。

昔話は夜語るものとだいたい相場が決まっていました。

昼間、昔話を語ると天井裏のねずみに小便をかけられると言っで、聞かせてもらえなかつたのです。

南会津では、冬の夜に、麻から糸をとる『おうみ』という夜なべ仕事をしながらよく昔話をしたものでした。

ある人は、おじいさんが『げんべえ』という藁ぐつを作りながら話してくれたのを聞いたそうです。

夕食後の団らんのひとときを、おじいさんやおばあさんの昔話に耳をかたむけて、時を過ごすことはどんなに楽しかつたでしょう。今ならば、テレビやラジオでそれなりの楽しみ方もありますが、何の娯楽もない、ひと昔前の山村では、昔話は人々に大きな楽しみを与えていたのでしょう。おじいさん達の記憶をたどると、昔話を最も語ったのは、やはり長い冬の間であつたとのことでした。

雪国の生活は昔話の機能を生き生きと活動させて、その伝承と保存に大きな役割を果たしてきました。それと同時に、昔話は幼い子どもたちには格好の教材を提供していま

した。

子どもたちは『桃太郎』や『勝々山』などの話によって、そのことばの端々から、やってはいけないこと、やってもよいことなどの社会生活の基本を、知らず知らずのうちに学んでいったのです。現在、残っている昔話の中にもそのような教訓めいた話や、感動を呼び起こす話がたくさん残っています。

昔話は口伝えのもですが、その伝承の中心が家系にあることは言うまでもありません。その他、昔話の伝わり方には、名も知らぬ行きずりの人から話を仕入れたりする場合もあります。南会津の南郷村では、行商に來た富山の薬屋さんから昔話を聞いたという例、また、そのとなりの伊南村では、げたぶちといって、げたを直しに來た職人さんから聞いたという例がありました。

#### 〔昔話の伝承と保存〕

しかし、このように昔から語り継がれてきた昔話も現在

では次第に失われつつあります。南郷村で民俗の研究をしている安藤紫香先生は、

「あと五年も経つと昔話もなくなってしまいました」とおっしゃっていました。

激しい近代化の嵐の中で村の生活はどんどん変わっています。若い人は故郷の村を離れ、ほとんどが都会へ行ってしまうのです。村を歩いていても、二十代の若い人々を見かけることはあまりありません。ただ二回、盆と正月のときに故郷に帰るだけです。テレビ・ラジオや冷蔵庫などの電化製品や石油ストーブなどの普及は村人たちの生活を利用で豊かなものになりました。しかし、外から入ってきた文明の利器と引きかえに村人たちが先祖代々引き継いできた良いものまで、今やなくなろうとしています。昔話などはその代表でしょう。私達が訪れた家でも昔話を聞かせてもらおうとすると、

「昔、小さいころ聞いた覚えはあるけど、今はもう忘れちゃってだめだ」

と言われることがたびたびでした。子どもたちも今では、テレビの影響でガッチャマン（テレビ漫画）などにはおもしろがっても、おばあさんの語る昔話には興味を示さない場合が多くなってきました。おばあさんの方としても、子どもが聞きたがらないので、話す機会がないわけです。このおばあさんたちがいなくなってしまったら、この南会津ではもはや昔話を聞くことはできなくなるでしょう。

このように口から口へと語りつがれる昔話は消えつつあるのですが、一方、都会では口伝えの昔話とは別の「民話ブーム」なるものが起きています。町の大きな書店へ行けば民話コーナーと称して、民話の本がずらりと並べられています。また、ラジオの番組にも取り上げられています。

文化放送で毎日午後五時三十分から放送している夕焼け民話や、FM東京のFMファミリーで毎朝十時から放送している民話はみなさんも聞いたことがあると思います。新聞や雑誌にも民話のページがあります。本屋さんのPR新聞や銀行の広告にも民話が登場してきました。

このように親から子どもへと直接伝えられてきた民話が、今度はラジオや本を通して紹介されるようになったのです。しかし今なお、どこかの山奥へ行けば、名もないおばあさんが子どもたちをいろいろの周りに集めて、おもしろおかしく子どもたちに昔話を聞かせている所に出合うかもしれません。

## 南郷村・伊南村・舘岩村の民話

団子むかし

カッコ内は採話地区名

(南郷村・舘岩村)  
とのおのす

やき飯にぎつてもらつて、おにぎりな、山さ柴切りに行つた。お昼になつたから、食べてえと思つたら、おにぎりが高い山からころげ降りて、じいさま、追っかけやつただと。

「だんご殿、どごまで、どごまで」

どつて、そうやつたらば、

「遠くの堂まで、堂まで」

どつて。そういつて、やき飯追っかけて行きやつたらば、堂ん中さ、ころころつとやき飯ころげ込んだんだと。おにぎりがな。そうしたらこんだ、ほれ、鬼つていが、たいへんばくちぶちしてやつただと。ばくち。そんだけいさま、あの行

ぎやつたら、何だが人くせえ、人くせえなんてか、鬼がさわいだんだと。そうしたら、じいさま、夜中んころコケコッコーなんて鳴きやつたんだと。そうしたら、鬼たまげて、

「ああ、夜明けたんだ」

と思つてか、銭、金おいで鬼逃げて・・・じいさま、その銭、かつさらつて家さ帰つたんだと。そうして、じいさまとばんばが、一生、それでじゃ、食べてやつたど。なんて語り語りしたんだ。

食わず女房

(伊南村・大桃)

むがし、よぐ(欲)の深い人が、奥さんもらつて食べ物食べさせるのが惜しくて、そして、なんぼもらつても、食べ物惜しくて、まだ追い出し、まだ追い出し、なんぼもらつても追

出してしまつて、そしたらあるとき、奥さんにしてくれたという人が、手まねして、その口のねえ女が来ただつて。じやあ、これだら食べ物食べねえからいいだろうと思つて、口のねえかかだらよかんべが、そんな大飯食う奥さんなんかいらねえからと、みんな追い出しちまつて、そしたらば、あるとき、口のねえ女が来たんで、それで奥さんにしてくれつて手でやるもんで、口がねえだから、食べ物食べないからよかんべと思つて、そして奥さんにしといたんだつて。

そしたところが、米がばかに減るんだつて。ほいだから、不思議に思つて、毎日山へ出ていたんだが、そんじやから、山へ行つたふりして、二階にがいに見てたんだつて。そしたらば大きな釜にいっぱい煮て、いっぱいぼんの上におにぎりして、にぎつてから、何しんだなと思つてかぐれて見てたらば、頭とぐがら、何しんだろう思つたらば、頭といてみたらば、ほんのこんな口が頭ん中にあつて、おにぎりしたのをひよいひよい、ひよいひよいと頭さ投げて、そしてこれは米が減るほがあねえと思つて、そしてそうつとおりで来て、

そしてまた山から帰つて来たたら、またきれいに頭ゆつて、平気で黙つているんだつて。それから、しようがねえがら「お前、はあ今日かぎりおがれないから出る」つて言つただつて。そいがら山へしよつてつて置いてきたんだつて。自分はいかにえから、おぐれつちゆうごとかんだつて。だから、指さす方へしよつてつて置いて来たんだつて。

そしたらあどから、追いがけらつちえ、追いがけらちえ、人間とこでねえ、まるで山姥やまんばのようになつて、気味悪くて、夢中になつてかけただつて。そしたら上の方がら、

「よもぎしようぶの中へかぐ（隠）れろつ」  
てどなるような音がすんだつて。

今、むがしからそうだが、五月の節句には、しようぶとよもぎを屋根にさすだよな。屋根にさしたり、風呂に入れて入つたりすんだ。節句の晩には、そんだから、よもぎしようぶのあれがあつたがらよがつたと思つて、そこにやつとかぐれていたら、化け物も見つけけないで、山へもどつてはし

ただって。

勝々山からからやま

(南郷村・鴉巢)

あるところに、おじいさんとおばあさんがあつたそうだ。そして、おじいさんは山へその薪とりに行つた。それからおばあさんは、家で仕事をばしておつた。そうして、おじいさんは、山へ薪をとりながら、その、その辺へ、そばを作つたそうだな。

そうしてその、作つていたところへ、たぬきの野郎が出てきて、そばを荒らしてしようねえ。そんでその、輪つかをかけた。輪をな。そうしたら、うんまくその、たぬきは馬鹿だから、その、首ひっかけてその、暴れやる。それから、おじいさんは、その朝行つて、気勝手だから、よくも歩いて来

てな。そして、よくこう吊るしておいたでな。そしてまた、また今だ、おじいさんは山さ行つた。おばあさんは、いろいろのそばで、その、米搗きをした。そしたら、逃げるからな、ほら、おじいさんがいねえもんだから、たぬきが目をさまして、

「おばあさん、おばあさん、私の手をとつてくれる。そしたら、おれ、あんたに米を搗いでやるから」

「うそだべ。逃げつから解かねえ」

「いや、逃げねえ。必ずあの搗いでやつから」

「ほんとうか」

「ほんとうだ」

それから、解いできたそうだ。そいでまつ、一生懸命、ま、やつたが、見てたじゃが、

「おばあさん、搗くくのよう搗けえんねえから、おまえへえせ、おれ搗くから」

若いしな、おばあさん、臼のそばでこうやってたんだ。そしたら、にわかきにその、たぬきの野郎が杵きねを持って、ばんば

ごとはたいで殺しちゃった。そしてこんだ、こんだ、おじいさんがまだ帰って来ないんだな、おじいさんが。そうしてつとこさ、こんだ、ばんばをこんだ、裸にしてな、ばんばをようつて煮てから、おじいさんの来るまで。わかんねえから、おじいさん、煮ただ。

「ばんば、ばんば、今来ただ。たぬき汁煮ておいたか」

「たぬき汁煮ておいた。そんじや、汁、早く寄つてま、酒も飲んで食わっしえな」

そんだたぬき汁、じいさま喜んでな。そんてま、たぬき食いやるわけだ。いいかげんに食つたところへ、こんだ何だとも変なおいするようだ。

「ばあさん、なべからでねえか」

そしたらこんだ、たぬきがこんだな、耐えつとしようねえと思つて、こんだ逃げ出した。

「はあ、おじいさん、おじいさん、たぬき汁はねえ、おれがたぬきで、ばんば汁食つた」

つてか、うくとみに出してしまった。そうしたらこんだ、お

じいさん、がっかりしてな、

「ばんば殺して、ばんば食らつちや」

そして、隣に、次郎と太郎という男つこがいた。そこで言つたそうな。

「次郎、次郎、太郎。おれは、ばんば殺さつてばんば汁食いらつちや。何とか、たぬきを復讐する方法ねえか」

「・・・(聴き取れず)・・・あれは魚を食うだなんいうからおれ、むしろかけて置いたから、そこへ追い込むだ」

そういうわけでその、まずだでな、何のこづ来た。そうしてこんだ、うんまく両方からで、その次郎と太郎とおじつさ、じゃぼーんとはねこんで、川ん中で、野郎泳ぎできねえもんだから、むしろさへえつて死んでしもうた。それでじい様、えれえ喜んで、次郎と太郎に、かたきを、ばんばのかたきをとつてもらつて、そうして、とうふ汁を買つて、くれて、ごつつおうしたとかいう話があつた。これはざつとむかしという話だな。

猿むかし

(伊南村・大桃)

むかし、山うなつてそして、つぐ(作)ったんだ。おじいさんとおばあさんが、そしてあんまりこわく(たいへんなので)てひとりごと言つたつて。

「こんなにこわいのには娘三人もつていたが、どれでも好きなのくれつから、この畑うなつてくれる人があつたらば、好きなのくれる」

つて。そして、ひとりごとか(語)だつたところで、山で猿が聞いてて、そしてじゃあ、あのこと聞いたつて。それから私、うなつてやるから、んじやら娘くれつて。まあ山でおじいさんが約束してきたからつて、うちへ帰つて家で、その子ども三人のうちどれか聞いてくれればいいが、もし聞かなかつたらと思つて、まあ心配で、心配で、眠れず、布団の中に寝で、そして、一番上の娘が、

「おじいさん、おじいさん、どうして寝てるんだ」

つて。

「ご飯ができたがら、まあ、食べに起きろ」  
つて言つても、

「何もかぜをひいたわけでも何でもねえが、お前、猿のお嫁さんになんねえか」

つて言つたらば、

「そんなばかして、人間が猿の代わりになられるもんでねえつて、何とぼけてるんだ」

つて、おごられて、困つたなあつて、またはあ、がっかりして寝でたらば、次の娘がまた、

「おじいさん、おじいさん、かぜひいたのか、腹いでえのか、ご飯になつても起きないで。そしてこうして寝で、どうしたの」

つて言つたら、

「何もかぜひいたでも、腹がいでえでも何でもないが、あの猿ど約束して、あんまり、山の畑うなうのにこわいので、娘三人もつていたが、そのうなつてくれる人があつたら、

どれでも好きなの一人くれるって約束してきたが、お前らがいうこときかながったら、俺は猿に食い殺されんだか、何だかわからねえと思って、心配で寝でだ」

「ほいじゃまだ二番目の娘おごって、そしてどしんとふんで、そして行っただつて。」

困った。もう一人しかないのに。それがきかなかつたら、俺は猿に食い殺されちもうだと思って、まだ心配で寝でたら、まだ末の娘がきて、そして、そのわけ語つたら、

「じゃあ、私が親孝行するから、起きろ」

つて。そんじゃあよがったつて。それから起きて、ご飯食べたり娘の買い物に行ってきたりして、そして猿がいろいろに迎えに来るからつて、約束したので、そして喜んで猿ももらつていったが、なんとかして猿を殺したら、わが身ひとりの自由になれと思って。

そして、まだ三月のお節句になるがら、もぢをついてそして、おじいさんのところによつていきましようつて。

そして、もぢついて、臼うすのまま、もぢ入つたまま臼しよつ

て。もぢ、じゅうばちかなんかに入れようつて言つたら、その奥さんが、

「じゅうばちなんか、うちのおじいさんは、じゅうばちくさいつて食わないから、臼うすのままがいい」

つて。

じゃあ、奥さんの言うとおりにそして、臼うすのまましよつて、そしてこんだ、

「じゃあ何か桜の花が咲いだからとつていきましよう」  
つて言つたら、

「そうだ、桜の花はおじいさんは好きだから」

つて、そして

川端かわぼたにおよんだところを、

「下の枝これをしよおつへ」

つて、そして登つて、猿を臼うすしよつたまま、そして木に登つて、そして、その枝ではだめだから川へおよんだところを、

「これが？」

つて言つたら、

「まだその先へおよんだどごろを、枝を折った方がいい」  
って、それ、まあ猿を殺したくって、一番上のおよんだ枝を  
登ったら、ワリワリワリワーツと、猿が、臼しよったままだ  
がら、重みがつだから、川にどさんと落ちたもんで、そし  
て、喜んで家へ帰ったところ、

猿沢に死する命はおしくない

あとで姫ひめごがさこそなげかん

と歌うだつて。そして、ズブズブと流れていったところ。  
いつちやさけもした。

### 三枚のお札ふだ

(採話地区名不明)

盆になつたら、盆花ぼんばなをとつてこうどつて、(小僧が)和尚  
様にいいすがつてな、小僧、盆花とりにいった。

そしたら、盆花(なかなか)がなくながなくて、日が暮れだなあ、真つ  
暗に。しかたがねえがら、ちつとあがりのすつところさ行  
った。寄つてみるどつて、小屋さ寄つてみた。そこのうちは  
鬼ばんばだから、鬼ばんばのうちだったがら。鬼ばんばど  
つて・・・ばあさんがいだがら、そうして、

「よるはんを食え」

じつて、鬼ばんばがなあ、よるはんをださったら、そのよる  
はんは、食いもの、かえるだのへびだのこうおっ切った  
ような生きものだ。その小僧、まがゆくて、食わんねえ、食  
うふりういしてこう、ここん中へこぼしたけえ。

「こうだどごろにいらんねえがら、ぬげべはあ、ええつさ  
行く帰るど」

っていったの。そうしたら、

「やらんねえ、それ食わねえならんねえがら、やらんねえ」  
そんじやら、しようねがら、

「便所さいぐど」  
つて。

「はがしてやんねえ。そんじやら綱をつけでやる」

小僧にこうなわをつけ、なわをつけで、便所にいったら、  
雪隠せっちん神様どつて昔あつたど、便所の神様が、

「ここにいんば、食われつから、おれ、なわもつてつがら、  
早くぬげろ」

どつて。それがら、雪隠神様にといでもらつてな、なわを、  
そうして、札ふだをくれつからど、山になれ、川になれ、火にな  
れど、三枚の札をくれ、そうして、鬼ばんば、

「はあ便所さ、長くいるもんでねえ。早くこう」

つて、ひっぱりやつたど。したら、雪隠神様、おさめで、や  
つから、ながなが、やいひっぱりやつたらば、その木ごと、  
雪隠がつぶれで、雪隠どつて便所の神様、つぶれで、鬼ばん

ばまで、つぶれで、こう神様のおなぎや下に、そのうちに小  
僧、はあ行つて、それがらよう、鬼ばんばがはいだして、  
追っかけやつたに。したら、

小僧はのろいがんな、鬼ばんば速いがら、追いつがれたん  
だ。それがら、

「山になれ」

つて札なげた。雪隠神からもらつた。したら山になった。鬼  
ばんば、山ん中ながなが登れねえど、そのうちにまだ小僧  
ぬ(逃げ)げてぐ。山をこえてまだ、追っかけていぐとこんだ、

「川になれ」

したら、川をながなが鬼ばんばは、越えるの容易でねえ、小  
僧はそのうちに早くぬげる。しめいには、

「火になれ」

どつと火になった。火の中は、鬼ばんばは、ながなが通れね  
え、そのうちに、小僧はもう家まで行きづいだ、家まで行き  
づいだ。

「はあ、夜が明けだから、早く戸を開けてください。おれ

は、鬼ばんばに追われて、食われてしまう」

すたら、和尚さん、

「までまで、今おぎたばかりで、便所へ行ってきでから」

「なんで、なんで早く戸を開けで」

「までまで、今、帯をしめでから」

て、なかなか、やんやっちゃあど。したら、ばだばだしやう。

そうしているうちに、戸を開けで、そんじやら鬼ばんばに食われるならば、それかくしてやつからど。あそこ、つづんでなあ、とにかくつるしていきやつたど。

そしたら、そのとき、鬼ばんばが来て、

「和尚さん、和尚さん、ここさ小僧来ながつたか」

「来ながつた」

「ここん中にいだ、何だ」

ど、おしてみやつたど。小僧ちぢまって、

「これは、おれが大切な食いもんだ」

「ああそうかい」

そこらじゅう家捜ししたど。

そしたらついあの、井戸ん中まわってみたら、わが影映つたど。

「これはここん中にいだ、小僧だ」

どつて、飛び込んで、鬼ばんばは、あの死んでしまったど。

鳥呑み爺

(南郷村・和泉田)

爺様とばんばあんだ。地藏様、昔山ん上さあつたんだが、爺様山へ行きやつた。ばんば後から、ぼた餅こしやつて飯しよって行きやつた。そしたら、

「ぼた餅こしやつてきたが、爺さん食いやれ」

どつて、

「そこさ置いてくれる。今はやめて、昼飯時食うから」  
どつて。そしてばんばが置いてもどつてきた。

こんだ爺様、仕事やめてきて、昼飯食うべえと思つて、木だっこさ葉っぱさ乗せて、木だっこさ山の神様、一つあげておいた。昼飯時来て食うべと思つたら、美しい鳥飛んできて、そのぼた餅さ食っちゃった。爺様、

「ちきしよう。人の餅食っちゃったな」

どつて、鳥ぶつ殺して、焼いて食っちゃった。それが、晩方ばんがたになつたらば、なんかへその辺、むずむずする。へそに羽根生おいただ。そしたら引っぱつてみた。なんだつてこんなとこ羽生おいたか引っぱつてみた。鳥鳴くんだ。

すつぺた すつぺた すつぺつぼう

おお ひょうがん寺じ ひょうがん寺じ

とつてぐ もつてぐ ほしいほい

なんて。爺様、へそ鳴くんでたまげ果てて、そいだ、家さ晩方戻つてきて、

「おれな、にしおまへがぼた餅持つてきたが、山の神様さあげ

ておいて、食うべと思つたら、美しい鳥さ来て、そのぼた餅食っちゃったが、そいでおれ、ごせ（腹が立って）え焼けつから、鳥ぶつ殺して、焼いて食っちゃったが、おれへそさ、羽根生おいてきた。その羽根引っぱつてみたら、鳥鳴くんだもんで、音すんだ」

「教えやれ」

そいで引っぱつてみた。そしたら、やつぱり、

すつぺた すつぺた すつぺつぼう

おお ひょうがん寺じ ひょうがん寺じ

とつてぐ もつてぐ ほしいほい

明日は殿様のお通りだから・・・昔の殿様のお通りなんて、『下に』どつて、話らんねかったがな。そばにあらかいて、道わきによつて、爺様いやつた。殿様がおとがめになつて、

「そこにいだすは、何やつだ」

どつて。

「そこにいだすは、へそ鳴らしじじいだ」  
どつて。

「鳴らせるなら、鳴らしてみろ」  
それで、へその羽根引っぱって見たら、やっぱり、

すつぺた すつぺた すつぺっぽう

おお ひょうがん寺 ひょうがん寺

とつてぐ もつてぐ ほしいほい

なんて。そうしたら、殿様たまげ果てて、それから、そのの  
爺様、たいへん官位もらった。

そうだ昔、聞かせらっちゃだ。

## 柳長者と松長者

(館岩村・湯ゆのまた岐)

まあ昔、ざっとむかしあったと。柳長者と松長者ちゅう  
仲のいい友達で、それで、柳長者ちゅうが、まあ、唐だな、

「唐からてんじく天竺てんじくでさ、おれさ行つて仕事してくる」

って。まあ、行くに三年かかんだ。来るに三年、向こうに三  
年、まあ、九年も行っちゃったんだ。行つて、(唐のその大  
臣忘れちゃったもんな。なんちゅう大臣よしだっけかな) 葦刈  
りばかりさせられちゃつて。

ほして、葦刈り三年して、はあ三年経ったもんだから、

「はあ、おれはうちさ帰る。帰りたくなつたべえ」

って。そして、

「そんだら、三年間葦刈つてくれたから、あのまあ、唐天  
竺にも二本しかない扇だ。その扇を一本やるから」

三年葦刈つたお礼に一本もらちゃんだ。そしてまた、来  
るに三年もかかってきやつた。そしたら、来る途中、こわい

と違って、休んで、一生懸命、扇もらつてきたので、あおいでやった休んで。

そしたら、こう見たらば、上に鶴と亀のくつついた扇だから、はなれて、上に飛んでんだと、鶴が。下に亀這はつてんだと。これはたいしたのもらつてきた。なんだか休んでたら、変な腐れ臭いんだと。そしたら、前に馬が死んで腐ってるんだと。

「はあ、臭や臭や」

って、一生懸命あおいでたら、その馬が、だんだんと生きだしただと。こう、臭やと思ってあおいだら、今ちつとあおいだら、ほしたらこう、足に向かつて一生懸命あおいであおいだら、立ったと。そしたら、立って身ぶるぶるする。

「いや、大した扇だ。これはおれの宝物だ」

それから馬、あのいっちよめいになったもんだから、それに乗って来やったんだ、家さ。

そしたら、うちさ持つて来て、うちにはかかあがいんだから、かかあのとこさ来て、

「は、今もどる」

「ああそうかい。よかった」

って、お祝いなんかした。そしたらば、松長者ちゅうもそこに来たんだ。友達だから。何年も離れてて珍しくて。そしたら、

「おらはこういう扇もらつて来た。そしたらば、鶴が上に飛んでんだ。下には亀が這はつてる」

「大した扇だ」

ちゅうわけで、よっぱら飲んだり食ったりして大騒ぎして、松長者は家さ帰った。

「柳長者のやろうは、ああだあな物持つて来た。おれは何とあかしてその扇を、同じ様な扇をめつけてやる」

そしてめつけて、こんだうちさ呼んだんだと。

「おらのうちさ、来てみ」

って。そしたらば、また呼ばれて行った。呼ばれて行って、こんだ、扇の自慢のしっくらべした。酒くれて、よっぱら飲ませて酔いっぶしておいて、扇とつかえちまった。そうし

たら、とつけられちゃ知らない。酔ってるから。そしたら、

「おらの扇はこうだ扇だ」

「いや、おらの扇は大した扇だ」

「そんなじゃあ、あおいで、あおいで負けたら首とつからちゆうわけで、やったところが、すりかえられちえつたもんだから、なんぼあおいでも、出ねえだ。そんどもんだから、首切られちゃった。

いや、そうしていたところが、こんだ、唐さ行くって、その葦刈ったがなが、一晚で燃えちまつただつて。その柳長者が首取られちゃ。そんどもんだから、唐の旦那が、

「首を取られたに、殺されたに違いない。おれが行かなくちやなんね」

そして、来るに三年もかかんだ。そうすと、こっちの体は腐っちまう。死んだからな。そしたところが、うちさ来てみたら、かかあ一人とぼしくいた。そしたら、

「旦那様、こういうわけで首とられて死んだ」

よく、いろいろな話、かかに聞いて、こんだその松長者の

家さ行きやった。行ったらば、

「柳長者は生きてたんべか」

「生きていねえ。おれ、首取ったんだから死んだ」

「生きていたんべえ」

それ、柳長者をあおいで、一生懸命あおいで生かしておいた。生かしたんだ、その、唐から来た旦那様が。それ生かして、羽織着せて、ぶっつけておいた。そして、松長者の所へ行った。そしたらば、

「死んでいねえちゆうが、いた」

ちゆうで、

「ほんじゃら、いたっていつても、おれ殺したんだからいねえ」

「いや、いた」

「いねえ」

つて争いして、柳長者の家さ来て、聞いてきた。ほしたらちやんとして、柳長者はすわっていた。ほんだから、

「お前の首、取んなきやなんねえ」

松長者は殺されちゃったんだ。その旦那様に。それ程の扇をもらってきよったわけだが、それから戻りやったんだべが。それで今、そういつてる。

柳の芯は切ってもふきるが、松の芯は、切ってもふきない。柳の木はどんなに切ったってまたふきるが、松の木は、それつきりふきない。そのいわれだと言ってるよ。

### 和尚さんの話

(伊南村・大原)

ざっと昔があったと。

ある所にお寺があったと。そのお寺は貧乏で困っておつたで、門付けかどづして、もらって歩かねば暮らせねえ和尚さんだっただや。そして、京都さ暮れに行くのに、金ねえから、門付けしながら様子様子行くだよな。

拜んでるとき、(探話者中の女子学生のこと)ねえちゃんみてえな人が、餅持って来て半分ひつかいて和尚さんにけやっただが、和尚さんはわかつただな。そうして、

十五夜に 十五夜に 片割れ月があるものか  
袖に隠れて いま半分

どって、歌歌いやんだな。そう言われるもんだから、娘は残り半分袖から出して、和尚さんにくれたやな。

それから、だんだんだんだんずうつと様子様子行くうちに、こんだ、別の家さ行くつちゆうと、お金くれたんだな。和尚さんは、またそこんとところで、歌歌えやんだな。

今見し 今見し 花のこずまを たてかくす  
障子は 春の霞なりけり

と歌うと、今度、中で娘が、

今見し 今見し 花のこずまを おりたくば

今宵は こよいここに 旅の客僧

どつて、歌 歌うんだな。今度おれんとこさ泊まって行けつて。そして和尚さん、泊まりやんだな。

泊まるつつうと、その夜遅くなつてから、その娘が和尚さんの部屋さ忍びで出かけたが、和尚さんは、旅の疲れで眠つちまいやつたでな。そんで、娘、行灯あんどんさ 書置き書いて、その部屋から出て行くんだ。そしてそれ見て和尚さん、行灯さ 上の句 書いたが、京都さ行つた帰りに下の句書いて、またその家さ寄つたら、その娘は、恋の病になつて死んじもうただな。その歌ちゆうは、

夜を待ち 夜中を恨む あかつきの

君がおもわねばこそ しばしまどろむ

と。こんで、いちがさけえもうした。

姥うばの皮

(伊南村・大原)

ざつとむかしがあつたと。

あるところに、夫婦者があつたと。そして、娘が一人いたと。子供が一人できたわけだ、女の子が。だんだんだんだん大きくなつて、嫁さんに行つたど。そうしてこんだ、その嫁にけたうちさ、そのおふくろさんが、泊まりに行くだど。行く途中に今度、蛇がびつき(カエル)くわ啜えて呑み込んでしまわんとしていただ。そして、そのおふくろさんが、そのびつきを助けたわけだ。蛇を追い払つてな。

娘のうちまで行くうちに、暗くなつちまつたわけなんだ。暗くなつちまたら見えんようになつたし、困つたなあ、どつて行くうちに、ピカーリ ピカーリ 光のするうちがあつたわけなんだ。そしてそこさ、

「今晚は。遅くなつたで、泊めてください」

とつて、二人していろいろ話しているうちに、

「おれは、今日おめえに助けらっちゃびつきだ。助けら  
つちやお札に、姥の皮つちえ、おめえにくれっから。この着  
物を着れば、なーんでもなんだ。なーんでも化けられんだ」

そうして、その着物をもらって、今度、ずっとずうっと、  
その家から出て、娘のとこさ行くうちに、また暗くなっ  
ちまったが、また光のするうちあるもんで、そこさ行って、  
お願いして泊まっただ。そこに泊まったところが、飯炊き  
している婆さんがいてな。

「ここは鬼の家だから、鬼つこめらが来っつうと、ひでえ  
めにあわせらっから、来ねえうちに戸棚こん中さ隠れて待っ  
てる」

って。そういわつちやもんで、おふくろさん、  
早くご飯さ食べて、戸棚こん中さ隠れたわけだ。

そうして隠れているうちに、めつつ(木の弁当箱)に化け  
ちまったわけだ。姥の皮着てな。化けて戸棚こん中さ入って  
みると、鬼つこめら帰ってくるわけだ。

「ああ人臭え、人臭え」

「なんも、人なんど来ねえど」

そして、まあ、鬼つこめら何かしていて、みんなそれぞれ  
に寝ちまったもんだ。

その明日あした、おふくろさん、明るくなったら、鬼の家さ出て  
行くべえと思っっているうちに、道中こんだ、人がいっぺえ  
集まって、やんやんやんやんつってんだ。

「なんだ」

つって、そこさ行ってみると、その家は、嫁取る息子がい  
るわけだ、その家は。そして、お稽古の女どもがいっぺえ集  
まって、

「あの梅の枝さたかっている鶯を、逃さねえように、枝  
がりさとつてきた娘を、おらちの嫁にする」

とつて、そう言いやるわけだ。そうつと木のところまで行  
ぐ。なんぼ行っても行ってもとれねえわけだ。

そうしてこんだ、そのおふくろさんが行ったら、（そのお  
ふくろつつうのは、娘訪ねて行くうちに、旦那が死んじま  
って、一人っこになつちまったわけだな。）姥の皮を着た汚

い婆さんが梅の枝とつてくるわけだ。鶯をつけたまま。そうして鶯とつてきて、その次は、

「真綿の上さ、わらじはいて、足さ粘んねえでいた人を、おらがうちの嫁にする」

とつて、鶯のと二つ、問題が出たわけだ。それで、もう、女ども、その息子がいい男だもんで、そのうちの嫁さんさ、なつちやくてなつちやくて、いっぺえ集まってやんやんやつてるわけだ。だれも、わらじさはいて、真綿の上さ、足粘んねえように歩けねえわけだ。

その婆さん、また姥の皮着たまんま歩くつつうと、粘んねえわけだ。ちよつとも。そんじえとうとうその婆さんが、その家の嫁さんになつちもうわけだ。娘んところ行がねえうちにな。

そして、そのうちこんだ、夜になって、親類の者みんな集まったけんども、あんな死にかかったようの、きつたねえ婆さんを嫁にするつつうことは、反対しやるわけだな。そんだけども、きちんと二つの問題をやったんだから、はあ、

どうしても嫁さんにしなくちゃなんねえわけだ。そんで、その家の嫁さんになって、そうしてこんだ、その晩、その家の風呂、姥の皮まといて入ったが、あがったときには、こんだ見違えるようの、娘のように若くなつちまって、嫁さんになつちまったわけだ。そして、その家で一生安樂にくらしちまったと。

こんで、いちがさけもうした。

化け物に食べられた話

(伊南村・白沢)

昔はねずみに食べられないように、かち栗を軒につるしておいた。

あるとき、女の人が、一人で家にいるのが寂しいので、箱に入って軒につるしてもらった。そのとき、人を食べてし

もう化け物がいて、人臭いので、はしごをかけてその箱のところに行こうとすると、その女の人が、かち栗を一つカチツとかんだ。すると化け物は、家が壊れるのではないかとびっくりして、はしごを降りたが、また登って来た。そこでまた栗を一つかむと、化け物はまたびっくりして降りた。が、とうとう栗を全部かみつくしてしまい、化け物に食べられてしまった。

### きのこの化け物の話

(南郷村・和泉田乙沢)

ざっとむかし あったと。

ある村に鎮守様があつて、その鎮守様に、毎晩毎晩<sup>おおぼうず</sup>大坊主が出て、毎日毎日 村の人の大話になつた。もうとてもその鎮守様の前通る人なくなつてしまつて、村の人も大困<sup>おおこま</sup>

りで、

「どうかしねえかなあ」

などと、いろいろ考えたが、なかなかいい案がなかったんだと。

毎晩毎晩、見上げるような大坊主が出て、その村、はあ、夕方になると、<sup>だあれ</sup>誰も、一人その鎮守様の前通る人なくなつてしまつて、困つてたとき、旅人が来て、

「鎮守様、おれ泊めてもらうか」

つて泊まつたんだと。その村の人が、

「泊まんねえ方がいいぞ」

つて、そういわつちやら、そしたら、

「おれ、その坊主見てえから、ぜひおれ泊めてくれる」  
つて、そのお宮さ泊まつただと。

そうして、

「今来<sup>く</sup>つか、今来<sup>く</sup>つか」

と思つて、夜中のころ、寝ねえで待つたら、ドツスリドツスリと足音始めただと。

「これはよかった。どんな大坊主来るのか」

と、思って楽しんでみにして、旅人が見てたんだと。

そうしたら、だんだんだんだん出て、その人話しただと。

「お前は何だ」

「おれは、きこの裏のきこの化けもんだ」

「そうだ、そんだらば、どのくらい化けられるか、化けてみろ」

と旅人が言ったら、だんだんだんだん大坊主になって、見上げるほどとなって、

「これでおれが化け物は、これだけだ。あと化けることもできねえ」

「そんじゃら、おれが化けっから、おれの姿見てろ」

って、お宮の裏さ行って、いいお姫様の真似して出てきて、

そのいいお姫様見て、その化け物がたまげて、そうして感心してるうちに、

「そんだら、また別にしてみっから」

って、こんだは大きい男に化けて、まだいろいろできる。若

い小僧になったり、あらん限りの化け物んなって出てきて、

その人は何だかと思ったら、芝居師の荷物持って、役者だった。役者だから、いろいろに化けることできて、そんで、

大坊主、はああ負けちまって、そんで、

「ここで、（おまへ）にしも化け物、おれも化け物だから、二人で仲良く話しおうべえ」

って、お宮の中で話をしたら、

「お前は何だ」

「おれは、ここらの旅役者で、いろいろに化けてあって、人に見世物にする化け物だ」

「お前は何だ」

「おれは、この裏にあるきのこの古物、（ふるもの）何年も前から出ているきのこの化けもんだ。そんじえ、古くなったから、

今こうして化けて出るんだ」

「そうか、そんなら嫌いな名を話しっぺえ」

そう言ったら、きのこの化け物は、

「お前は何が一番嫌いだ」

って訊きかったら、

「おれは、なすのおつゆが一番嫌いだ」  
って言った。

「そうか」

「お前は何が嫌いだ」

ってったら、

「おれは、金がいっとう嫌いだ」

って、役者がそう言っただと。そうしたら、

「はあ夜明ける、こんで別れべえ」

って。

「おれはこんで寝(こ)るから、お前も行って寝ろ」

って。きのこの化け物は、裏の山さ行ってしまつて、そうして村の人に、

「みんな、このお宮さ集ばれ」

って。

「あの人は、タベ、あの坊主にどんな目にあつたかなあ」  
って、村の人びつくりして来たらば、その人はちゃんとし

て、

「ここさ集ばれ。お前たち、裏の方の山さ行って、きのこ、どこにあつか見て来い。そのきのこに、なすのおつゆ煮て、熱いのを持つてつてかけてこい。そうすつと、化け物出なくなつから」

そうして村の人は、

「本当だな、本当だな」

と思つて山さ行つたらば、本当に古いきのこあつただと。

そのきのこに、なすのおつゆ持つていって、なす汁かけたんだと。そうしたら、そのきのこは、くつたしらになつてしまつて、よくよくべつたらになつてしまつて、その晩から化け物は出なくなつてしまつた。

そんで、きのこを食つたときは、なすを食うと腹さこわさないという、たとえの昔だ。

そんでおわり。

貧乏神

(南郷村・和泉田乙沢)

ある村に、一人のなまけ者があつたと。そのなまけ者が、毎日毎日遊んでは寝、寝ては食い、起きては遊んで、食べる物もなくなつたから、田地田畑でんちでんぼたみんな売りとばして、働かないで食べていたから、こんだ、何にも食うものなくなつて、「家もなげうつて、それからおれは、北海道さ行つて暮らすほかねえ」

と思つて、明日に履はくわらじないから、今夜のうちにわらじ作つて、明日履いてぐがなをわらぶつて、わらじを作り始めて、朝げ待つて、

「ここさ出て、引越すべえ」

と思つてたら、誰もいねえ家で、トンコトンコトンコトコとわらじぶちの音する。

「はて、おら家には誰もいねえのに、わらじぶちの音がする。これは不思議だ」

と思つて、よつぽど行つたのをもどつてきて、こう、家の中見たら、それこそ、頭はぼうぼう、ひげはぼうぼう、ぼろぼろの着物を着た爺様が、トンコトンコトンコトコとわらじぶちしてた。

「(おまえ)にしは何だ、この家の」

「おれは、この家の貧乏神だ。にしいなくなつては、この家にいらんねえから、にしにくつついて行くが、履物ねえから、これからわらじを作つてそれ履いて、にしがあと北海道さ追つかけて行くから、先行つてろ。おれはあとから行くから」

それで、その人考えただ。

「この貧乏神がおれにくつついていって、また北海道に行つたつて貧乏して食うようねえから、とても行つたつてしようねえから、ここでやめつかなあ」

として、その貧乏神と話し始めた。

「なんで、おれがあとくつついて歩くんだ」

「お前は働くことが嫌いで、そうじも嫌い。ただ寝たり起

きたり食ったりが好き。おれはそんな人大好きだから、お前のあとくつついて歩く」

「そんでは困った」

と思つて、こんだ貧乏神に聞いてみたんだ。その人。

「何が嫌えだ」

と言つたらば、

「おれが一番嫌いなのは、札と金が一番嫌いで、その次は働く人が嫌いで、ごみの集ばつてるところのきつたねえところが一番好きだ」

つて。

「お前のように働かねえで、寝て起きて飲んだり食ったり、きつたねえ汚しておく人が一番好きだ。おれは、くつついていがねえなんねえだ」

「そうか。そんでは困った」

と思つて、

「おれはこつから出つことできねえ。働く人が一番嫌いだとすれば・・・」

これから朝に起きて、毎日掃除し始める。家のあたり清潔にし始めたなら、貧乏神もいらなくなつてしまつて、この家から出ていった。

そしたらこの人、毎日働き始めてから、たちまち金持ちになつて、そして貧乏神とわかれてしまった。

そんで、おわり。

願ひ事のかなう白の話

(館岩村・塩ノ原)

やっぱり昔、貧乏な良いお爺さんが、山へ柴刈りに行つたら、正月になるに、みんなご馳走を食うが、何もご馳走食うようもなにもねえ、貧乏で困つたどつて。

そしたら、山の神様だかな、山から出てきて、こういう打ち出の小槌に似だような白、この白だらば、何でも望み

しで（しだい）いの物が出んだと。

『米出ろ』ってえと、臼から米が出る。『小判出ろ』ってえと、小判が出る。着物、衣食住、何でも不自由なく、臼に願えば出っから」

ど。  
「このお（こ）げやつから」

「正直なお爺さんだから、けえから」  
ど。そうして、それをもらって来て、そんなもう、うんとこ馳走出して、いい正月しやつたど。

したら、隣の欲張り爺さんが聞いて、  
「その臼、おれに貸せ」  
どって。

「これは貸さんにえ」  
そんなじゃら、悪いお爺さんだから、夜、盗みにやつたど。臼を盗みにやつたど。そうして盗んでめえぐれいだから、隣にいりゃんねえがら逃（ぬ）げやつたそうだ。舟に乗って。舟に

乗って。そうしたら、舟の中でいろいろ出してみやつたげに。舟中で出したがら、舟が重だくなった。ほしたらしめいに、

「塩出ろ」  
だつたじゆうに、

「米と蔵出ろ、米蔵出ろ」  
なんて、米はいっぱい出やつただに、とでもみんな・・・そしたら、

「塩出ろ」  
どって、塩くわんでねえがら、そうしたら、塩出たどごはいが、海ん中で、舟ん中で、塩出す方は知ってるが、止める方しらねえ。

そんではがら、海ん中で、臼がぐるぐるぐるぐる塩を出しどおしてつから、それから今でもその臼が塩出してつがら、海の水は塩辛い。そして、悪いおじいさんは、海でおぼれて死んだどって。

蛇むかし

(伊南村・大桃)

お爺さんが田んぼ<sup>(作)</sup>つぐって、大蛇みたいのような蛇が、その水のかげ口にいたんだって。そのために田がひびわれて、水がかがねえんだって。そんなもって困って、

「そごどいてくれ」

って言ってもどがないで、あんまり困って、

「娘三人もっていたが、好きなのくれっから」

って、やっぱり猿むかしのように、末の娘がいうごときいたわけだ。そうしたら今度、末の娘が、お爺さんが花嫁したくしてやるからって、

「買い物に行くだが何が欲しい」

って言ったたら、

「何もいらないうが、そのふくべいに針千本買ってきてくれ」

って。お爺さんたまげて、着物かなんか買ってやろうと思

ったが、そんなもん何にすんだと思つてたが、まあ娘の言うとおりに、買ってこようと思つて、ひょうたんふくべいを千と針千本買ってきただつて。

そして今度、迎えにいっ行くからと、日取り決めて、まだ婿さんが迎えに来ただつて。むがしの大蛇だから人間に化けて、まあ、お爺さん、

「まあ、あんなにいい男なのに、蛇だなんて嘘か」

どつて言つたが、もう向こうの大川を越えるところに行つたらば、その大蛇、

「こんな大きい川どうして越えんだ」

って。

「おれに乗つて来い」

って言つたが、

「あんた先に越えろ」

って言つたら、もう越えるときになつたらば、大蛇になつてしまつて、そいですがい体でたまげちやつて、そのときにふくべい一つき一本ずつ針を入れて、川へ流しただつて。

そしたら、

「そのふくべいをみんな沈めたら、おれも越えっから」  
って。

「あんた先を越えろ」

って。そしてほら、一生懸命だから、越えなければ嫁さんが  
っかりしてしもうから、一生懸命なんぼこう沈めべえと思  
っても、沈まねえんだって。千本だものまさか。

そんだから、一生懸命沈めるうちに、蛇は (くろがね) 鉄 からだ 身体に

刺されば、もう命がないんだって。それがみんな針で、体に  
刺さって、そしてついに大川に死んでしまったと。

きつねに化かされた話

(伊南村・白沢)

梁取やなとりっていう部落の甚五郎さんという人が、よく栃木県  
の方へ働きに行き行きした。昔は生魚なんかなくて、みや  
げに買ってくるからちゅうそうで、家の人が待ってたそ  
の前日だった。

したらば梁取っていう部落と、こっちの下山っていう部  
落の間にあんまり深くない沢があったの。そしてそこは、  
きつねが化けて出るとこだった。

沢のでた道のほとりには畑があってね。その甚五郎さん  
が暗くなってしまうって、そこ、夜なつて通つたら、(きつね  
が)子持ちのようなおばさんに化けてね。小さい子供連れ  
て、四角行灯あんどん持って、甚五郎さんがこっちからお魚しよつ  
て帰つたら、

「おじさん、よく帰って来たなあ」

とかなんだとか お世辞を言って迎えに出たふりをしたっ

たと、その姿で。小さな子連れてきて、おばさん(氣取り)かげんだったんでしようよ。

そしたら甚五郎さん、話に聞いて、夜そこらきつねの出る沢だつて。このやろう、またきつねが化けて出たなど。

「尾っぽが出てるわ、それ」

って言ったただそうな。そしたら、ちよこちよこ体をかわしてきつねになっちまって、また沢だに逃げ込んだじゃった。そういうこともあった。

そして、もう家の人待ってたんべ、早く行こうと思つたら、自分の部落の方ずつとこう端の方、道通つたら、雪の上でしょ、春先、そうしたらこう山賊みたいのが出て、闘つたんだと。そしてさんさん闘つて、もう家に行つて疲れ果て、

「今帰ってきたぞー」

ちゆうわけで、ぶつ倒れちまってすぐ上がれなかつたんだと。

「お前たち好きなお魚、箱へしよつてきたから、早くおろ

して寝ろ寝ろ」

自分は疲れてたから、もうそこへ寝ちまつただと、上がんねえで。その魚の箱見たら一匹もなかったそうさ。

「どうしたわけだろうな」

つてだんだん考えてみたらば、

「ああ、村上で山賊みたいなのに会つて、闘いをしてきた。武器がないから雪玉にぎつたりして、さんざん闘つたんだ。そんだけ、きつねだったかな」

つちゆうわけで、目がさめたようになって。からっぽの箱しよつてきたんだつて。

硬い雪の上にふわーと雪が降つた晩だった。そしたら雪の上に甚五郎さん独りで闘つた跡があつた。そしたらはるか向こうに、きつねの足跡がちゃあんと少しあつた。昔はな、きつね、術かけつちゆうが、よだれたらすかゆつと、こつちの人間が化けるようになって、闘つたりするちゆう話で、そんなことでもしただかなんとかちゆう話。

甚五郎さん働かせて魚落つこちらせたくて。ほんとうは

山賊は何もいなかった。きつねは遠くで操ってたんでしょ。そして遠くに操ってた足跡があった。

昔の人間、ばかちゅうだか、きつねが利口ちゅうだかね。

## 田沢湖の伝説

(伊南村・白沢)

秋田に器量の良い娘がいて、この姿が かわんねえでいてえどつてな、神様にお参りしたらば、二十一日通ったら満願の日、

「お参りの願いをかなえてやる」

どつて、社の中から声があつて、そうしてそれから、山さ蕨<sup>わらび</sup>取りに行った。とてもものが渴いて水が飲みたくなつたもんで、沢さ水飲みに行っただ。

そしたら大した夕立になつてな、こぼすほどの雨が降っ

て、その山と山との間さすばらしい湖ができた。のどが渴くもんで、その水の中入つて大蛇の姿になつた。そしてそれが田沢湖の主の大蛇だ。

それで娘が山へ蕨取りに行ったまま来ねえもんで、親達を探しに行ったならば、なんだ今まで見たこともねえ沼ができてた。そんで娘の名前呼んで、なんぼ呼んでもわかんなかったが、しまいに大蛇の姿になつてな。

「おれが わがまな願い事をしたために こんな姿になつちまつたから、娘はいなくなつただから あきらめてける」  
こんだ 沼さ沈むときは、娘の姿になつて沈んだ。田沢湖とは、そういうことで出来ただ。

## 前沢の杉の木の話

(館岩村・塩ノ原)

杉の木が伊勢参りに行ってきたとか何とかいわれて、それから、そういうあれで、厄病やくびょう除けになって、むがし、私達子どものころは、その杉の枝を取ってきて、玄関の入口にやっつて、厄病が入んねえぞというがら、ずっとそうやっつた。

その木は県の文化物の指定となっている。

## 大原の鍾乳洞

(採話地区名不明)

それは大原の『かんりゆうがわひらのきぢちおさん』という人が確か、まあ案内(夜)やぐ(夜)というのか、あるいは、まあそうしたときの連絡場所というのがな、何かやっていますよ。

別にそこ、みぢ(道)はらったや、草刈ったなんていうことは、

あんまりやっつてねえようだけんど。それはまあ、越後のぎやおう洞に続いているという話で、それはまあウソだろうと言うんですね、続いちやいねえ。それでその辺まあ、たづゆうど、よごゆうど あんだけんども、その辺をやっぱりあんまり小便たれだとか、木の葉でも穴ん中へ石でもぶつこんだとか何とかいうごとすれば、まあ天気が悪くなつて大風おおかせが出たとか、ん、大風がでたと。

ようするに吹ふきつつうしたんだと、その家だけ。(投げ入れた人の家だけ)たでゆうちゅうのはあれでしょう、ずっとまつつぐ下へ、よごは、こういうよごへ穴。

長田の醤油屋の嫁と姑の話

(伊南村・宮沢)

長田の醤油屋の嫁と姑しゅうとめは、たいへん情け深かったそう  
だ。雪の降り始めのある寒い日に、その家の門先に、ほとん  
どかかとのすり切れたようなわらじを履いた、着ている物  
といえば乞食こじき同然の、寒さをしのぐことすらできないよう  
なものを着た乞食が門先に立って物乞いをした。見たらび  
つこをひいて、足のわらじも半分以上ない。お婆さんも見  
るに気の毒で、

「温めてやろう。もうお昼も近いことだ、うちに上がって  
少し温まりなさい」

と言って、うちの中へ招き入れて囲炉裏にあたらして敷物  
を与えてやった。

「そんな敷物を敷くようなものじゃあないから、私は。温  
まるだけ温まらしてもらいます」

ということ、その乞食が自分のわずかな風呂敷か何かに

包んだ小荷物のようなものを手元に置いて、さもうれしそ  
うに火にあたって、こうして手をさしかける。

そしてその嫁さんと見たところが、体のあちこちには、  
おできのようなものできて膿うみが出ている。手などの爪もほ  
とんど無いっていうんだね。そうすつとよくだんだんに見  
るといって、それは癩病らいびょうなんですね。

「これはたいへんな人を入れたな」

とまあ、初めはその嫁さんも姑さんもそう思ったらしいん  
だ。

しかし、やっぱりそういう尋常以上の情け深い人たちだ  
から、その上にもやはり気の毒だということが勝るようにな  
って、そして温かいものを食べさせてやったり、古い衣  
類などを着せてやったりしていたら、寒かったのを急に温  
めたせいか、お腹が痛いと言う。医者を呼んでやろうと言  
ったら、

「医者を呼んでも、一瞥のような体だから、ただの医者で  
は薬の持ち合わせがないだろうと思うし、ちよつと休めば

良くなるから、休ませてもらいたい」

というんで、その婆さんにねんごろに頼んだらしいんだな。そしたらその婆さんが、

「ここではよその人も来るし、具合が悪いから、座敷の方へ来なさい」

と言ったら、非常に恐縮して、

「座敷でなく、もし目障りめざわりならば土間の隅でもいいから、人目につかない所へ休ましていただきたい」

「そういうわけにはいかない。人間としてどんな人でも私の家では、敷物を敷いて休む所は、座敷か部屋に決まってるんだから、そういう所へ休まずと、いかにも情け知らずになるから、こつちへ来なさい」

と膿の出る手をとって、お婆さんが座敷へ連れて行って寝かしてやった。そこらまでで もう並みたいのの情け深い人でなかったことがわかるんですが、そこへ寝かしてかけものをかけて、きれいなものをかけて休ましてやったのですが、翌日になって、お粥か何か持って行って食べさ

せてやって、少しは落ち着いたか聞いたら、

「落ちつかねえ。誠に申しわけねえが、私はもうここから動くことができなくなりました。もうこれが定命じょうみょうであろうと思われる。臨終が一刻か二刻の間に来ると思う。この見ず知らずの、しかも業病しゅうびょうにかかっている者を座敷まで上げていただいて、こうして休ましていただいて、ここで命を落とすのは誠に申しわけないが、私としては非常に幸せな臨終だと思う。誠に申しわけないが、後の始末はお願いしたいと思う」

「そんなに心細いことを言わないで、医者を呼ぼうじやないか」

「いや、これは私自身でなければわからない。もう臨終が迫っておりますから、そればかりはおやめいただきたい。お願いが一つあるのだが、聞いていただけるだろうか」

「何でも言つてごらんなさい。叶かなえられるものならば、叶えてあげるから」

「実は、この嫁さんは乳飲子をかかえてるようですね。

そのお乳を飲ましていただきたい。そしたら、それが私にとって末期の水となるだろうから」

こればかりは断られるだろうと思つて、そう言つたらしいんだな。そうしたところが、嫁さんがあらわに胸を開けて、

「こんなにいとやすいことはない。金があがなえることや手であがなえることなら、何でも私たちにできないことはないので、何でも遠慮なく話してごらんなさい」

と言うと、

「もう私はこの世にはそれだけだ。乳を一口飲みたいんだ」

これは業病ですのに、かわいい子供に飲ませる乳だから、まさかこれは飲ませてもらえないだろうと思つたらしいんだな。そして、その真っ白な胸を開けて乳を口に含ませてくれたつていうんですね。そしたら本当に一口だけ飲んで、涙を流しながら、

「ありがとうございました。どうかお子様にあげる前に乳首をきれいにしておあげてください」

と言つて、しばらく無言で寝てたらしいんですね。そして

一刻か二刻経つたときに、いよいよもう臨終が近づいてきたというので、

「実は、自分の行為や体を始末していただくとするのは、あまりにあつかましいことに、この因果な病気のため、誰も身内の者ももうそばには寄つてくれません。それをこへ呼びいれてくれただけではなしに、あらゆることをして、私のかなり無理だと思われる『乳を飲みたい』というのにも乳を飲ましていただいて、もう何も思い残すことはありません。それをしていただいた御礼にこれをさしあげたい。これで始末していただくとう長い間貯えていましたが、私が亡くなりましたらこれを開けて、これで弔いを済まして座敷を消毒していただきたい」

と言つて息を引き取つたというんですね。

それから枕元の下から出した汚い包みを開けたら、中に袋が入っている。袋を開けたら、中にその時分の小判で五十両が入っていた。当時の五十両、それも小判だったんですから、大変な値打ちがあつたらしいんですね。そしてそ

の人の身内も何もわからないから、自分の身内や村の人を集めて立派な葬式を出してやったというんですね。

おそらく葬式を出しても十両とかからない。三両か五両で相当大きな弔いを出せたでしょうね。石碑を建てて、坊主にねんごろに頼んでも、四十両という金が残るわけです。その四十両を商売につき込んだとしたら、相当商売も発展したと思う。そんなわけですから、この家は発展して衰えることを知らなかった、ということを知ったことがあります。

明け六つ暮れ六つのおこり

(南郷村・和泉田)

むかしむかし、奥深い山の沼のほとりに、山小屋を作り、一人淋しく炭焼きをして住んでいた男があった。

春の木々に新芽も吹き出し山桜の可憐な花の盛りの夕暮れのこと、珍しくも一人の美しい女が訪れて一夜の宿を乞うた。道に迷ったそうであった。若者は突然の美しい女の訪れに、とまどいながらも驚くばかりであった。

「それでは・・・」

と泊めてもてなし、女はどうとう炭焼きの仕事まで手伝う身となり、夫婦となって毎日炭焼き仕事で暮らすことになった。

月日も流れて、いつか女は身ごもりの身となり、お産の月も来たので、女の言うには、

「決して中に入ったりのぞいたりできないように、節ふしなし板で産屋うぶやを建ててください。二十一日間は見ないで、それまでは是非お願い」

と言われたが、男はゆかしくてどうしても見ぬわけにはゆかず、ある日のこと、そつとのぞいて見て驚いたのである。

女は元の蛇の姿でお産をしたので、見られては大変と、お産の姿を見られては、このまま母としておるわけにはゆ

かず、

「私はこの沼に住んでいる主の大蛇である。生まれたのは立派な男の子である。この眼をなめさせて育ててください」と、大蛇は左の眼を抜いて、小さい眼玉を男に差し出した。

子供をおいて、大蛇は沼の中ほどに大波をたてたと思うと、大波を揺り動かして沼の深みへと隠れてしまった。

「困った事があれば、沼の竜神に頼んで私を呼んでください」

と言が残したのであった。

子供はすくすくと育ったが、ある日のこと、ふいに眼玉をなくしてしまった。男は困って、いよいよ沼のほとりに出て竜神に頼み、母の大蛇に出してもらい、母も、

「困ったことだが、大変だ、それでは今度は右の眼玉を抜き取って渡しましょう」

と、右の眼玉を抜きとって男に渡し、また大波もろとも沼の中に入るや、

「これでは、私も全くのめくらになってしまう。夜の見さ

かいても昼の見さかいてもできない。母として願いがあ

と哀願して、

「朝の夜明けと夕方の日暮れ時には、必ず鐘をついて知らせてください。私の最後のお願いです」

と言つて、姿が見えなくなった。

男はその後、終生、鐘をついて怠ることがなかったという。これが明け六つ暮れ六つの始まりと伝えられている。

【補足】 こうした昔話を絵に描いた縦一メートル、横二メートルほどの額が、南郷村和泉田乙沢の不動尊の屋内に掲示されている。

天狗にさらわれた話

(伊南村・大桃)

むがし、五つの子供が、そのあんまりだだこねで泣くん  
だつて。子供によく聞かせ聞かせしただよな。

そのうちは子供ができなくて、まあ神に信心して、その  
子供ができるようにしただ。そしたら男の子ができたんだ  
つて。ほんじよが大切に大切にしたから、もうきかなく  
てきかなくて、甘えて、あの、あんまり大切にして育てたも  
んで、自分の自由にしてあげれば、きかなくてだだして、し  
よがなくて。これではしようがない、あんまり甘やがすか  
んだつて、そしてお父さんが、鍵の向こうへ投げ出したん  
だつて。そしたら、おがあさんは、ほらかわいそうだがらつ  
れでこようとして、

「まあ、もう少しそうしとけ。あんまりきかないがらくせ  
になつたら」

つて言ったら、鍵ガリガリとむしるような音がすつから、

はあ、帰って来るだろうと思っっているうちに、泣き音が聞  
こえなくなったがら、泣ぎやんで来るだろうと思っ  
ているうちに、こなくなっちゃったんだつて。

そしたらあの、そのうちには聞こえるのに、隣の家には、  
だんだん山の方へ泣いで聞こえるような音がしたつて、隣  
の方の人が、ついその子がいなくなっちゃったんだつて。

そしたら天狗様がつれていぎやっただつて。神様  
の申し子なのにそういうことをして、やっぱり天狗様がつ  
れでいぎやっただつて。

そういう話もあつたんだよな。

子安地蔵のいわれ (再話)

(採話地区名不明)

子供たちが、地蔵様を引き回して遊んでいた。それを見

た檜枝岐ひのえまたの人が、もつたいないと言って、京都へ持って行って塗りかえをし、自分のものにしようと思った。

そしたら罰ばちが当たって子供が死んだ。それで、大原にもつてきて返した。

#### 塩清水しおしみずの由来

(館岩村・塩ノ原)

塩が出てな。やまがちでる塩がこう清水になつて出てな、塩清水ちゆう名前、今でもあるが、昔、塩が出たんだ。

その塩、夏などやっぱり塩が出たんだ。その塩、夏などやっぱり、塩のいりが村の村で、たくさん塩が、塩でぎだそうだ。不便なとこでなかなか塩、他がら持つてくるようねえがら、まあ清水を、その塩をまず、使ったもんだ。その塩を盗みに来る人があつてなあ、隣村から、『おもり』どつ

て、こう、塩を守る人をやどつといて村から、それからおもり清水清水どつて、今でも名がついてるなあ。

今でもおもり清水つて名はみんな知ってる。俗名。塩が出るから塩ノ原つていう名がついだそうだ。もとは、今はでなくなつてたが、清水、塩清水ちゆうあざ字が今でもあるなあ。

#### 沼の主の話

(館岩村・塩ノ原)

あそこの下に沼があつて、あの畑が今ありますな。その畑の下に沼があつたがら、今は川しろ、川になつてる。その沼に、イモリがな、イモリどつて、それが主ぬしなつどつて、昔から大きくなんだなあ。その沼に大きく、化け物ほど大きくなつちつた、それが住んだそうだ。

その沼に、それから、その向いに、川向いには、今のギゴウ(ギゴウ)向いにもやっぱり沼があつてなあ。川をへだつて、その川は今、今の道路が川だったそうさ。そこには、ドジョウの化けもん、ドジョウの大きいのがいたそうさ。そうして、かわるがわるかけ声に、かけあいにどなってるそうさ。

「ドジョウえー」

どつてどなり、

「どらんぼうえー」

ど。どらんぼうえーとどういう意味だか。

「ドジョウえー」

「どらんぼうえー」

どつて、ぼつかだな、ちゅうど、相方でかけあいにどなりあつて、寂しかったそうさ。

イモリの化け物は、大洪水で沼が流れて川になつて、いなくなつちまつた、イモリは。ドジョウのほうは、いづまでもいでなあ。いだから、そこを村中でその沼を干してな。水をくみあげて、中にそのドジョウを、どういふ化けもんだか、

見るつもりで干したそうさ。そうしたらそれが、和尚さんが来てな。

「その沼は、干さない方がいい」

どつて、

「なんでかんで干さねえなねえ」

どつて、村の人が集まつてきかなかつたそうさ。その和尚様は、粟ふかし、粟でふかしをこっしやつて、食物、今は赤飯どつて米があるが、昔は、粟でふかす。

「その和尚様もどうぞ召し上がってください」

じゅうわけで、和尚様にも赤めしを充分あげたり、村の人も食つたりして・・・

そしたら、そのドジョウが、中にいでなあ、ドジョウを、腹(腹を裂いたら粟ふかしがいつぱい入つていた)は、さいでんから、粟ふかしをいつぱいやつた。和尚様が化げで、そのドジョウも和尚さんに化げでいだどがいう、ホウセツ(ホウセツ)主どつてのは、主になるとかいつて、昔の人の話には、

「ながし(ながし)汁なごき、ドジョウをはなすど、主になつた」

どか言って、ドジョウが大きくなって化げんだって。

【解説】

ながし（流し）・・・炊事場の水を流して物を洗う場所。

南郷村・伊南村・館岩村の民話【話者名と題名】

- 〔南郷村・鶺鴒<sup>(地区名)</sup>〕 酒井いくの  
 「団子むかし」・・・・・・・・・・・・・一六
- 〔南郷村・鶺鴒〕 酒井久七
- 〔勝々山〕・・・・・・・・・・・・・一八
- 〔南郷村・和泉田乙沢〕 五十嵐ヤス  
 「きのこの化け物の話」・・・・・・・・・・・・・三三
- 〔貧乏神〕・・・・・・・・・・・・・三六
- 〔南郷村・和泉田〕 目黒フミ  
 「鳥呑み爺」・・・・・・・・・・・・・二四
- 〔南郷村・和泉田〕 五十嵐二平  
 「明け六つ暮れ六つのおこり」・・・・・・・・・・・・・四七
- 〔伊南村・大桃〕 星 トミノ  
 「食わず女房」・・・・・・・・・・・・・一六
- 「猿むかし」・・・・・・・・・・・・・二〇
- 「蛇むかし」・・・・・・・・・・・・・三九
- 「天狗にさらわれた話」・・・・・・・・・・・・・四九
- 〔伊南村・大原〕 星 忠枝  
 「和尚さんの話」・・・・・・・・・・・・・二九
- 「姥の皮」・・・・・・・・・・・・・三〇
- 〔伊南村・白沢〕 大宅えよの  
 「化け物に食べられた話」・・・・・・・・・・・・・三二
- 「きつねに化かされた話」・・・・・・・・・・・・・四〇
- 〔伊南村・白沢〕 羽染サクノ  
 「田沢湖の伝説」・・・・・・・・・・・・・四二
- 〔伊南村・宮沢〕 河原田平内  
 「長田の醤油屋の嫁と姑の話」・・・・・・・・・・・・・四四
- 〔館岩村・湯の岐〕 大山スエ  
 「柳長者と松長者」・・・・・・・・・・・・・二六
- 〔館岩村・塩ノ原〕 黒川一郎  
 「願い事のかなう白の話」・・・・・・・・・・・・・三七
- 「塩清水の由来」・・・・・・・・・・・・・五〇

「沼の主の話」	五〇
(館岩村・塩ノ原) 地元の和尚様	
「前沢の杉の木の話」	四三
(採話地区名・話者名不明)	
「三枚のお札」	二二
「大原の鍾乳洞」	四三
「子安地藏のいわれ」	四九

## 民話採訪調査を終えて

私たちは過去三回にわたり、福島県南会津郡の南郷村・伊南村・館岩村を訪れ、百五十話以上の昔話や伝説を採集してきました。そして、村の人たちの温かい好意に恵まれ、その生活を知ることができました。私たちの普段の生活とは異なる、山村生活の感じたことを、各自がまとめてみました。

民話採集を行って

秋山美春

南郷村・伊南村での民話採集もすでに三回を終え、一応全地域を訪れることができた。三年前に民話分科会が発足してから、採訪をこの地域に決定する前に、何か所か他の地域を訪れてみたが、この地域程長い期間をかけてやった

所はなかった。というより、調査をするのに長い期間を必要としなかったのである。勿論、私達の調査方法が全く幼稚なものであった事を認めないわけにはいかないが、話者がほんのその地域の知識人（物知りな人）に限られていたからであると思う。

それらの地域では、すでに自分たちの子供に語って聞かせた経験を持つてらっしゃる人が、いらつしやらなかった。そこで、地域の民俗学的な事柄に関心のある人が、それまで出していた資料をもとにして、自分のものにしていった昔話を聞かせてくださったわけである。つまり、内容は似ていても、語り継がれてきたものではなかったのである。話が、資料の範囲を脱し切れたものではなかったため、物足りなさを感じたと共に、出版物にある民話以外の話の宝庫を見つけることの困難さを感じたのである。

二年目にいたつてようやく、運良く、その民話の宝庫と言われる地域、この南郷村・伊南村を発見できたわけである。本当に運良くと言うよりほかない。というのは、やはり

世間で民話の宝庫と言われるような所は、ほとんど調査しつくされており、私達はそのすでに行われている調査の再確認をするということに、他ならなくなってしまう事が多分にあるからである。この南郷村・伊南村もやはり、調査は各方面から行われていたが、民話に関するものが不足していたことは、私達にとつては幸いだったのである。そこで多くの方々から、楽しく語っていただいたわけである。

私達がお年寄りの家を訪れるときは、初対面であるので、まずある程度構えていくわけである。しかしそれを、村の人々は、「よらっしやい」「あがらっしやい」と言つて、快く受け入れてくださる。本当にも知らぬ私達を調査のためとはいえ、気持ち良く家に入れてくださり、いろいろもてなして下さったことは、村の人々の温かい心を感じずにはいられなかった。

民話を語つて聞かせていただくために訪れたのだが、それ以前に、多くの話で相手の心の中に入り込む事は、大変むずかしい。生まれも、育ちも、年令も全くちがうという事

をのり越えて、自然にとけ合つて行かなければならない。

昔話を語れるような雰囲気を作り出すのは、やはり聞き手の役割りであると思う。ここのひとつのお年寄りは、いくつかはご存知である。ただ語っていないため、自分の頭にはあるが、聞かせられないという方が多い。無理もないと、私自身つくづく思う。今の大人達(私達も含めて)が、たとえこれらの昔話を子供のときに聞いたとしても、現代のような情報社会では、情報量が多すぎて、語っていないければ、年寄りになつて思い出すことは、今のお年寄り以上に困難なことであると思う。

しかし、今度来るときまでに、思い出しておこうと言われるとき、民話を聞くことができるといううれしさと共に、お年寄りと同じ合うことができたという自己満足的なものを感じた。

それらの人の中に、多くの話を覚えていた方、自分の子供には聞かせてやった方に数人出会った。本当にあの民話を語る独特の口調で語つてくださり、私達を何か別の世界

に引き込んでくれた。自分の体のつらいこともおさえて、私達の要望に答えてくださった方、民話をしばらく語らなかつたが、私達が何度か行くと、最初は、いやがっていたテープレコーダーにも、しまいには声が良く入るように気をつかってくださった方、本当にも知らぬ老人と、民話を語ると聞くという事でつながりをもて、自分にとってお年寄りが身近な人となり、多くのことを学ぶことができた。

現在は、民話を語りつぐ習慣が失われ、本やレコードで民話がブームになっているが、本当の感動は味わえないであろうと思う。やはり、語る人と聞く人の一体となった世界ができ、それによって、人間同士のひとつのつながりが生まれていくことが、民話の世界ではないかと思う。

私は、南郷村・伊南村で、生の民話を聞いたわけだが、私がお年寄りのような語り手になれなくとも、何らかの形（本を読み聞かせるようになるかもしれないが）で、子供たちに民話の良さを、感じさせることができるよう、心がけて行こうと思う。

民話採集によって、わが分科会とつながりを持った、南郷村・伊南村であるが、私にとっては、第二のふるさとがそこにあるような気がしてならない。

出会い

磯前礼子

河原に寝ころんで、ぬけるような青空を見上げる。

「私、どうしてもここにいたいんだろう。どうしてもこんな事やっているんだろう」

と、ふと思う。

考えてみればおかしなこと。小さい頃から人見知りをし、人前で話をするのが苦手だった私が、全くみず知らずの家を訪ね、おじいさん、おばあさん相手に話をするなんてことは。

「民話なんて集めてどうするの？」

という声がどこからともなく聞こえてくる。

「君の今の生活と一体何の関係があるんだい？」

と誰かが言う。

これで三度目か。この村とも親しくなったものだから……  
第一回目ときは、ただ単に、メルヘン的なものにあこがれ、民話の中にそれを求めようと、とにかく、話を知りたい、実際に聞いてみたい。それだけだった。

しかし、実際、村を訪ねてみると、そこには今まで私の知らなかったさまざまな生活、そして人間がいる。生身の人間が……

「人間」というものに興味を持ち始めてから、村の人々の親切な心に触れると、つい感傷的になってあれこれと考えてしまう。いろんな人がいて、それぞれ自分の生活を持ち、様々な感情がからみ合っている。

そういう中で生まれた昔話には、民衆の夢、心があり、人生に対するきびしきがある。人生哲学——こう言うとおおげさかもしれないけれど、村を訪ねること、未知の人に接す

ることによって、「生」について考えさせられる。そして、昔の人たちが、何故このような昔話を創造したのかと考えるとき、生活の苦しさ、必死で生きようとした民衆の心、切実な願いがわかるような気がする。そして、この民衆の心を知ることが、私達に課せられた義務の一つであるとも思う。昔話は、芸術的には素朴で、幼稚であるけれども、どんなにすぐれた文学作品にも優るような隠れた魅力があると思う。

一軒一軒訪ねて、未知の人と話をするのも「であい」であり、二度と繰り返すことのない出会いへの招待を大切にしたい。

採集活動を、あまりにも情緒的に考えているとか、それはただの感傷にすぎないとか批判されるかもしれないけれど、私は、そのときそのときの人の心を大切にしたい。様々な生活の中で、いろんな人の心に常に触れながら、自分なりに受けとめ、考え、歩いて行きたいと思うから。

今度、南郷村及び伊南村の合宿を自分なりに整理するにあたって、「南郷村の民話」とか題して、何か書いてみたいと思った。が、いざ手をつけてみると、現在の私にはおおよそ無理であることがわかった。そこで、ここには、合宿地で見た事、聞いた事をもとに、感想のようなものを綴ってみようと思う。

南郷村には既に三度足を運んだわけだが、同じ所に三度も行ったという気がしない。いつも新たな気持ちで臨めたのか、それとも、土地の雰囲気に浸りきってしまったて、一回毎の目的をはっきりと意識しなかったためか。私は初め、実際に昔話を聞きたいという事だけで、いかにしたら語ってもらえるかと、無我夢中だった。それが二回目には、その他の伝承にも少々興味を覚え、今年の夏には、村の人たちの生活なども知りたいと思うようになっていた。もし、この変化が、自分の民話を見る目の広がりであったらうれし

いと思う。

南郷村：一口に言って、私には魅力のある土地だ。そこではまだ、普通に民話が語られていた頃の生活について、実際に土地の人々の口から聞くことができたし、曖昧な気分的なものかもしれないが、今日の自分の生活に欠けている部分、見失っているものがあるような気がした。この感じは、一体何に困っているのだろうか。ちょっと考えてみると、山間の地であるという地理的条件、縄文の頃から人が住み、五万石騒動なる百姓一揆の語り伝えられる歴史、指折りの豪雪で代表される気候、などがあげられる。中でも特に、雪の影響の大きさは、まだ雪の降り積もる三月に訪ねてみて、はだで感じたものだ。そのとき、土地の人が、「今はかわってきたが、大戦前までは、村の若者の楽しさ」というと、村の行事や書物を読んだりすることくらいだった」と話してくれた。これは、ほんの一部の事であったかもしれないが、私は、ここに、雪国の閉鎖性ととともに、その中で

の静かな落ち着いた生活の一端を垣間見たような気がした。

かつては、今以上に、雪に閉ざされた冬の生活は厳しいものであったに違いない。だから私の感じたあの落ち着きは、冬の間、外での活動を全くといってよい程閉ざされてしまうことに対するあきらめのようなものからきているのではないかとも思った。この長い間、戸外での労働を離れるという事は、現実から一步退いて自分のまわりを見直すという意味での民話をはぐくんできた。そして、山間のあまり豊かな土地でなかったことが、お互いに協力することが必要とし、自分たちの生きることを妨害するものとの間には、徹底的な対決を余儀なくされるという民話の世界に、この土地をより近づけていたように思う。

私達は実際に家々を訪ねてみた。そしてしばしの雑談の後、いざ本題にはいると、必ずといってよいくらい、

「昔話などは子供に語って聞かせるもので、よい若い者に聞かせられるようなものではない。それにもう忘れてしまった」

という答えが返ってきた。

ここでいろいろ説明やら何やらして、なんとか語ってもらえる事もあったが、たとえ語ってもらえなにしろ、まとまった話のある程度の数というわけにはいかなかった。初対面の人に対する相手の人の遠慮や私達の聞き方のまずさももちろんだが、次のように言う人もいた。

「自分たちも、子供のとき聞いただけで、大きくなってからは聞きたくても聞かせてもらえなかったし、普段は一度にそうたくさん語ってもらうことはできなかった」

と。しかし、こういうこの人が、一つもつかえずに語ってくる昔話を聞いていると、

「子供の頃聞いた話を、なぜこうも生き生きと語れるのだろう」

と不思議に思わずにはいられない。昔は今よりずっと情報の量が少なかったし、一つの話を繰り返し繰り返し聞いたというのも重要な点だが、それと同じくらい、民話そのものの中に、人々の心の奥深く残るような要素があったから

だとは言えないだろうか。

「子供時分には、たのおもしろかったり、こわかったり、かわいそうに思ったりしたただけだったが、今考えてみると、あの話はこんな事を言ってたんだなあ」という人がいた。

この人は、子供のとき、無意識に聞いて覚えた話の中から、生きていく上で、必要に応じて怒りとかやさしさとかを汲み取ってきたのではないだろうか。そして、その話はあるときには、子供のうちから弟や妹に語ってやることにより、より確かなものとなり、またあるときは、自分の子供や孫に語って聞かせるようになるまで、生活の中でみがかれてきたものだ。話には、おのずとその人の生きた時代や風土が映し出され、その人の生き方そのものにも、なんらかの形でかかわってきている。ちよつとした言葉に、その人の生きてきた重みのようなものを感じるとき、民話を聞く楽しみは増す。そして、さまざまな人によって伝えられてきた民話というものに、よりいっそう親しみを覚える。

文字の形に固定されないで語り継がれてきたということは、まさに民話の、民話たるゆえんであり、おもしろさだと思う。

今年の夏、私達に語ってくださった方に、星さんという人がいた。この方はずいぶんいろいろな話を知っているらしい。話を聞いてみると、その方のおばあさん（私達も写真を見せていただいた）が、なにしろたくさんの話を語ってくれたらしい。それに、私達が話を聞いているときには、側で、その方のお孫さんである六歳の男の子と一緒に聞いていた。その子には、普段も語って聞かせているとのことだった。やはり、民話が良い語り手と聞き手の上に成り立ってきたというのは事実だった。また、この方は、語ることを大切にしているように私には思えた。少しでもあやふやな所があるものは、

「つかえるとおもしろくないから」と言って、ガンとして語ろうとしない。いい加減に語ったのでは自分の気が済まないし、そんな事したら、罰でも

あたるかのようにだった。そこには、普通の話と区別される「語り」があり、これは語るということが、何か神聖な意味を持っていたことの名残りであるような気がした。

南郷村や伊南村には、この方とその男の子との間のような、語り手と聞き手の存在の上に成り立つ、調査のために語られるのではない民話が、わずかながら存在していた。が、私達の周囲と同様、大方の家では、もはや民話は語られていないというのも現実だった。テレビや他の何かによって、民話は本当に必要なくなったのだろうか。これまで民話の果たしてきた役割を他の何物かが、何らかの形で果たしているのだろうか。私は、はなはだ疑わしいと思う。遠祖から受け継がれてきた、生きる知恵を学ぶという意味でも、人間と人間との間の直接的なコミュニケーションという意味においても。

民話を問題とする場合、民衆が何を民話の中から汲み取り、あるいは、何をその中に語りこめようとしてきたのかということとは、とても興味ある点であると同時に、重要な

点だと思う。合宿で、実際に民話を聞く機会に恵まれた私達にとって、この経験を広げると同時に、この「何を」について考えていくことが、これからの課題の一つだと思う。

私にとって、以前は過去のものであった民話だが、最近、そうでもないような気がしてきた。聞いてきた話を自分で語ってみようなどと思い始めている。私は話すのは全く苦手だし、その風土における伝承を持たない私があの土地で聞いてきた民話を語ったら、その意味が違ってくるかもしれない。あるいはほとんど意味を成さないかもしれないと思いつつ……

御免ください

小栗幸宣

「御免ください。私たちは昔話を集めている者ですが、この辺にどなたか『むかし』を語ってくださいませそうなお年寄

りをご存知ですか」

私達は一軒一軒こう聞きながら歩きまわった。

「そうさなあ。あのじんじはおととし死んでしまったし・・・あそこのばんばは耳が聞こえないから駄目だ。こここの部落にはそんな人いねえだが、このひとつ上の部落さいかっしえ。そこに〇〇ちゆう人あつて、その人はそんな話好きで、よくしてくれっから、そこへ行ってみんしえ」

訪れた家々のほとんどでこんな答えが返ってくる。そして、「まあ、あがつて休んでいかっしえ。お茶でも飲んでいかっしえ」

とくる。なにしろむこうもこちらも初対面だから、こっちも少しどぎまぎする。

「はあ」

などとあやふやな返事をして、のこのこ上がりこんでしまふ。でもむこうはちつとも迷惑そうな顔をしない。都会ではちよつと考えられない。好人ばかりだ。

「この村はな、伊南川の上下と駒止峠おさえると、もうど

こへも逃げられなくなるから、人は悪いことできなかったなあ」

私たちが合宿した南郷村開発総合センターの赤塚敏雄さんはそう言つて笑つておられた。

昔話には、見知らぬ旅人が一人住まいのお婆さんの家に一夜の宿を乞う場面がよくある。そんなとき、お婆さんは快く承知して泊めてくれる。私達に茶をすすめて、

「休んでゆかっしやれ」

と言つてくれたお婆さんの胸の中に、昔話のお婆さんが生きているのだろうか。その反対なのだろうか。

「あがらっしえ。たいらに、たいらに」

などとニコニコ笑つて言われると、こっちも悪い気はしない。

「はあ」

などとまたまたあやふやな返事をしながらも、中へ入つて座り込んでしまふ。そして、お茶を飲みながら世間話をする。質問は、もっぱらむこうからで、こちらは防戦一方であ

る。

「どこから来んしゃった」

「千葉です」

「どこに泊まってらっしゃる」

「山口のセンターに」

「いつ来んしゃった」

「おとといの夕方です」

などなど。

第二ラウンドでは、こちらもジャブを小出しにする。

「ここは涼しいですね」

「今年はいつもより涼しいんだ」

「蚕を飼ってらっしゃるんですか」

「そうだ」

「どのくらいとれますか」

「一夏三回で三十キロくれえだなあ」

第三ラウンド、いよいよ調子づいて攻勢に転じる。

「お婆さんはどこの部落で生まれたんですか」

「俺あ、この部落だ」

「じゃあ、ずっとここにいらっしゃるんですか」

「そうだ」

話がだんだんと子供の頃のことに向かう。頃合を見計らって、斬り込む。

「雪の夜なんかは、何をしているんですか」

「そうさなあ、ばんばがここに座って、俺あ反対側

で、いもなんか焼きながら、ばんばつくろいものしながら

『むかし』聞いたもんだ」

「どんな話ですか」

「さるむかしとか、山姥やまんばむかしとか、食わず女房とか・・・

ばんば、ひとつ語りやれ・・・語っから寝ろよ、なんてなあ、

毎晩毎晩聞いたもんだ」

お婆さんはほんとうにうれしそうに笑う。目を顔に刻まれたしわのひとつにして。こっちもうれしくなって、

「むかしひとつ語ってください」

などと言う。お婆さんは笑いながら、少し考えるふうであ

る。

「だめだ。もう覚えてねえ」

やはり笑いながら言う。でも、全く覚えていないことはまれで、話を断片的に憶えているが、継げることができないことの方が多い。中には場面だけを語ってみせて、子供のように笑う老婆もあつた。そのうれしそうな顔。

昔話の世界は、童話の世界である。昔話を研究するといふことは、その童話の世界に遊ぶことだと思いはじめた昨今である。

ある老人は、今の子供は昔話を聞きたがらなくなったと言う。別の老人は、昔話のように古いものは、はやく忘れて、新しい物を吸収した方が良いとさえ言う。

『むかし』は急速に滅びつつある。私達はそれに対して何をなすべきなのか。否、何ができるのだろうか。

## 南郷村合宿について

菊地美恵子

南郷村は私の想像に反して、意外と文化的な生活をしていた。山奥の寒村という私のイメージは、一瞬のうちにくずれてしまった。しかし、夏嫌いの私にとって、朝晩の涼しさは快適だった。南郷村にしても、伊南村・舘岩村にしても川沿いに集落が発達しているのが特徴だ。どの川も、澄んだ冷たいきれいな水をたたえ流れている。それとこの大自然に囲まれ、きびしくはあるが平和に暮らしているためか、八十・九十歳のお年寄りの多いというこの二点が印象的だった。また、人柄の良さ、温かさ、素朴さが初経験の私にとってとてもありがたくうれしかった。

私は生来、なまけ者で人を頼りにしすぎる傾向がある。その性格をこのたびも多いに発揮してしまった。昔話探訪のとき、(食事当番)食当のときなどあらゆる面において言える。探訪のときの同行者も『疲れる、疲れる』の連発であった。私自身、自分をずい分甘やかしているのに気づく。自己反省

しなければならぬことばかりだった。私は、同等の人の方が、活発に行動できる。隣に頼れる人がいなくなってしまうと、しつかりしなければ、と自覚する。合宿に限ったことではないが、何事も積極的な態度でのぞむということが重要だ。

私達の班が採訪してきた話は、館岩村塩ノ原で「三枚の札・だんごむかし・うり姫」をはじめ、塩ノ原に伝わっている昔話、また話者の体験談である『きつね火』『きつねに化かされた話』など、合わせて一軒の家で十六〜十七の話を集めることができた。また館岩村角生つのおうにおいては『絵姿女房』、館岩村貝原かいばらでは『カチカチ山』に似ているが、前半は少し違っているような話。その他短い話などである。

私は、はじめ昔話採集だけが目的であった。しかし、親切に対応してくれる人、耳が遠いのに一生懸命思い出し語ってくれる人の姿を見て、胸にじんときくるものがあつた。人間と人間のこのほのぼのとしたふれあい、たまらなくうれしかった。このような貴重な体験ができただけでも、私

は合宿に参加して良かったと思うのである。

#### むらの生活と民話

椎崎 洋

調査の第一日目、私は相棒と伊南村宮沢の部落に足を入れた。バスの都合から古町から歩くこと三十分余り。川を渡り山裾を行き、ようやく部落の入口に着く。盛夏の日照は強く、木々は美しく息づいている。道の片側には青々とした水田が吹き過ぎる風に波をうち、川を越えた向こう側の白沢地区まで続いている。川沿いの胡桃も実をいっぱいつけている。田畑に人はいない。盆のあいだは、みな仕事を休むのだ。部落むらは静かで、それでいて活気のある空気がみなぎっている。そう、ちょうどあのお祭りの朝のようだ。

私達は途方に暮れていた。片端からあたつていこう。とは打ち合わせていたのだが、この五十戸足らずの部落の生

活は大きかった。とにかく取り付く島がないのだ。道に沿って二件三件と家並みが続いている。裏の畑から取ってきたのである。トウモロコシとトマトを持ったおぼちゃん（お盆らしく小ぎつぱりした、目をつぶれば誰もが思い浮かべられるような）が、不審そうにこつちをちらつと見て、そして家の中へ入ってしまった。

やれやれ、また歩き始める。また音が、そして笑い声が聞こえてきた。左手の森の中、おっかなびっくり歩いていく。神社だ。『御社・香取神社』上の『御社』の文字は何故か消されている。五、六人の人が屋代の傍らで弓に興じていた。先ず第一声。

このようにして始まった私達の調査は二人とも不馴れなことや、お盆のため多忙だったりして、なかなかはかどらなかつた。一日中歩きまわり、それでもテープいっぱいにお盆行事や昔話・伝説を入れて部落をあとにしたとき、あのあたたかさが手を振っていた。

この部落に河原田かわらだという姓が多い。これは昔、この地に

久川城という城があり、その城主が河原田氏であったためである。それは何百年も前のこと、かつては沼田街道が通り、武士達の闊歩したこの地も、やがて重要性を失い平凡な山村となつていった。河原田氏が伊達氏と戦った古戦場も今は忘れられ、草原となつてしまった。

伊南川に沿って拓けたこの地は、山村ではあるが耕地に恵まれ、穀物は比較的豊富である。宮沢部落は伊南川の河岸段丘の上であり、香取神社を下に、上は稲田を挟んで浜野部落に絡っている。西側は山になり、その裾には桑畑が点在している。むろん、煙を吐き出す工場はひとつもなく、商店もその中心部にただ一軒だけあるにすぎない。だからといって閉じた社会では決してない。私達に話を聞かせてくれた人たちの中にも部落の外で働いた人もいたし、家族の中で数人が出稼ぎに行き、盆と正月しか帰って来ないという例もあつた。テレビ、ラジオは全ての家に普及し、車の保有数も少なくない。近年、東京へ出荷するトマトの栽培が盛んになった。午前中に収穫したトマトは翌日、東京市

場に出回る。都会の変動がすぐにこの村まで伝わってくるのである。

確かに子供たちは昔話を聞かなくなった。ウルトラマンや仮面ライダーが砂利道を走り回り、喚声をあげる。何より子供の絶対数が少ない。私達が行ったときには帰省の人たちがいたが、普段は閑散としてしまい、典型的な過疎の山村にもどってしまう。そこに残っているのは形骸化したお祭りとお祭りと、息タエダエの昔話、城跡等々。部落はその規範をもう少し大きな村へとられたらしい。そしてその村も、今では都会との関係によって成り立っている。昔は考えられもしなかった機械が導入され、田植えも刈り取りも人手を煩わすことは少なくなり、部落の共同作業は少なくなった。多々あった「講」も年を追うごとに減少している。

部落の生活は変化している。一般的な日本の村落はアジア的な自給自足的な共同体のうえに成り立っていた。その形態は日本特有の自然環境の中で比較的堅固に命脈を保っていた。民話はその中で育ってきたものである。民衆の生

活そのものであったのだ。部落の生活の中でこそ息づきうるものと言えらるだろう。その民話が今、変質していつている。いろいろ端でそれが語られなくなったとき、それは民話とその生命を失ったときであり、社会機構の根本的な変質とも言えるのではなからうか。そして私達の研究は、それを変化させていった現代文化の発達——交通網の整備、機械の導入、電気器具の普及など——を通して部落の生活を、そして私達自身の生活を考えていくことにある。

手まりうた

清水公子

南郷村の鴉巢トウノサと言う部落で、ひとつの『手まりうた』に出合いました。

おらがおぼこはよいおぼこ  
 もめんがっぱに茶のこそで  
 のらにも山にも寝てみたが  
 松葉にさされて目がさめて  
 ここはどこかと思たれば  
 鎌倉街道の森の下  
 森から続いて信濃まち  
 信濃のまちから何こうた  
 一にこうばこ 二にしぐれ  
 三に更紗の帯こうて



おらがおぼこはよいおぼこ  
 もめんがっぱに茶のこそで  
 のらにも山にも寝てみたが  
 まつばにさされてめがさめて  
 ここはどこかとおもたれば  
 かまくら狐どのもりのし



あからたり さがったり さいわい せいと



ひく ついた

この唄を何度も何度も口ずさんでいると、どこか淋しげ  
 このような節でうたわれます。

誰にくりようとこうてきた  
 おまんにくりようとこうてきた  
 おまんはいねもの死んだもの  
 それがおそたら墓まいり  
 墓のぐるりにゴマまいて  
 ごまん仏と拝まれた  
 上からたかめが巢かけた  
 下からすめが巢かけた  
 あがったりさがったり  
 さいわいせいと百ついた

なひびきを感じてきます。そこで、ちよつとこの旋律をみてみると、これは、ド・レ・ファ・シの四つの音の組み合わせで、陰音階のものです。私達がうたった『あんたがたどこさ』は、ド・ミ・ソ・ラの四つの音の組み合わせで、陽音階のもので、軽快で明るい感じがします。

このように、陰の唄がうたわれたり、陽の唄がうたわれたりするの、その土地の気候や、生活環境に関係するのではないかと思ひます。今のところ全く不勉強のため、はっきりは言えませんが。

今日では、まりつきのまりはゴムまりですが、昔はぜんまいの綿で作ったものだそうです。これは、ぜんまいの綿を干して、かたく、かたくして、形良くまるめ、できたものに色とりどりの糸で丹念に刺繍をしたものです。今日よくそこいらで土産物としてよく売られているものです。

自分で思ひ思ひのまりを作り、それをつんつるてんのべを着て、わらざうりをはいて、ついで遊んでいる子どもたちの姿が目にかんてくるようです。

思ひがけずわらべ唄を耳にしたとき、子どもの頃、お手玉なり、まりつきなりをしたことのある人なら、何か心に安らぎを感じるのではないでしょうか。めったに土の道を歩けない、コンクリートの建物と人の群れの中で生活をしているものにとつて、遠い子どもの頃のうす桃色の思い出を、ふつとわきおこしてくれるのです。

かつて私もゴムまりをもつて、近所の子どもたちと、

「あんたがたがたどこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本どこさ……」

とうたいながらまりをついた記憶があります。小さいときは、ただうたつていた唄も、大人になって聞くと、重たい、まるみのあるものに聞こえます。きつと子どもの頃の思ひ出が、その唄とかさなりあつてふくらむのではないかと思ひます。何気なく口ずさんだわらべ唄が、今の生活を振り返らせ、これからの生活に勇気を与えてくれる。わらべ唄つてそんなものではないでしょうか。

最近、まりつきやお手玉をしている子どもを見かけなく

なりました。この子どもたちに私達の知っている手まり唄なりなんなりを、なにげなくうたってやったら、もしかしたらいつまでも心の中でわらべ唄は生きてゆくのではないのでしょうか。

皆さんもちよつと口ずさんでみてはどうですか。

## 民話の世界

鈴木雅夫

民話の世界はいわば「正直者が馬鹿を見ない世界」であり、「夢がかなう世界」であり、「必ず幸福が訪れる世界」である。このような性格を持つ民話を単純すぎておもしろくないと言つて片付けてしまう人達がいるが、それは小説のような、内容に多くの変化があり、心理描写なども巧みに書かれている読み物を多く読んでしまっているから、そのような考え方をするのではないだろうか。しかし、私はこ

のような考え方には少し疑問を抱く。民話のよさは内容が単純だという一言では理解しえないと思う。では次に私の思う民話の世界について少し述べてみようと思う。

まず第一に言える事は、民話は口で伝えられる口承文芸であるという事である。これは他と区別されるべき特徴である。語り手から聞き手へ、そして聞き手が語り手となり、次の聞き手へと伝承される、このパターンが過去から現在まで存在しているのである。このようなパターンを考えただけの場合、民話の話の内容というものはそう複雑なものはないのである。あまり複雑な内容をもつ話は、話を覚える方にとつて非常に難しい事であり、聞き手にとつては、聞いている間に話の筋を見失う事にもなりかねない。口で次から次へと伝えられるという形を考えれば、必ずしも複雑なものでもなくともよいのである。また、今の人が単純すぎて面白くないと考えるのは、別の見方をすれば、単純なもの、素朴なものをそのまま素直に受け入れられる心が現在においては喪失しているとも受けとめられるのではないだ

ろうか。

確かに民話の話は内容的に簡潔なものが多いが、この簡明さこそ民話のもつ特徴の一つなのである。また、語り手から聞くという事は、話し手の手ぶり、動作、言葉の抑揚などで話を十分楽しく聞く事ができるのである。本を読む場合は、本と人という関係であるが、話を聞く場合は、人と人という関係になり、そこには語り手の人間性が関係し、人間的結びつきが生まれてくるのである。だからこそ民話は本で読まれるものではないし、本を読んでも民話を知った事にはならないのである。この事は話を直接に聞いたことのない人にはなかなか理解できないかもしれない。また、聞きたいと思ってもそう簡単に聞けない現状に現在はなっ  
てしまっている。

前に民話の世界が「正直者が馬鹿をみない世界」や「夢がかなう世界」だと述べたが、何故そのような世界が生まれ  
たかを考えてみよう。民話は上流階層から発生したもので  
はなく、一般庶民の生活より生まれたものである。偉い人

が作ったものでなく、多くの庶民の中から生まれて来たものである。

庶民という立場は、上の支配者から搾取される立場でもあった。庶民はいつもしいたげられた生活を強いられ、支配層に反抗する事は自分の命がなくなる事でもあった。そのような庶民は搾取されることに疑問をもちながらも、生活していかねばならなかったのである。いわば不満が鬱積うっせきしているが、そのはけ口となるものがなかったのである。このことはすでによく言われている事である。そのような生活は今の私達にはなかなか想像できないが、強いられることが多い立場にあった者達の心の動きは、一体どんなふうに動いたかを考えてみれば、当然の事ながら、もつと暮らしを楽にしたいとか、束縛されない生活を求めているのであろう。このような夢をかなえてくれるものが民話だったのであり、不満のはけ口が民話でもあったのである。

民話の中では、自分達がとうていできない事ができ、正義の味方が悪者をこてんぱんにやっつけてくれるのである。

だからこそ正直者は馬鹿をみないし、悪者は必ず罰を受ける形をとってあらわれる。

一応、民話のもつ性格を少し述べてみたが、他にも考えるべき点が多数あるが、それはまた、別の機会に残しておこう。私が言いたいのは、一見単純とも思えるものでも、よくそれをさぐってみると簡潔なもののもつ特徴や、内容の深さなど、考えさせられる事が多いと同時に、心をはっきりさせられるのである。

あまり多くは書けなかったが、民話のもつ性格の一面でも知ってもらえればと思つて書いた次第です。

はじめての夏合宿

津田奈都子

四月に民話分科会に入ったものの、昔話の本を読んだり先輩の発表を聞いていても、何となくピンとこないような、

物足りないような気持ちで、とにかく、はやく合宿に行つて実際に昔話を聞いてみたいなあと思つていました。そしてついにやってきた合宿。

第一日目、生まれてはじめての民話の採集に胸をドキドキさせながら出かけました。ところが家を訪ねても、

「知らない」

「昔に聞いたことだから忘れてしまった」

と何軒も断られ、採集の難しさを思い知りました。結局お盆についての話などはいくつか聞くことができましたが、ちゃんとした昔話は一つしか聞くことができませんでした。

採集三日目は一年生だけで南郷村鴉巢とのおすをまわりました。

そのときには三人で気楽に出かけました。一番先に、先輩のかわりにお礼に行った家のおばあさんが、桃太郎の話を聞かせてくれました。小さい頃、桃太郎の話は何度も本を読んだり、聞いたことがあつたけれど、これほど詳しく、また、心のこもつた話のはじめてでした。

そして酒井さんの家では、おじいさんとおばあさんと二

人で、『きつねに化かされた話・ざっとむかし(カチカチ山)・やきめしの話』など聞かせてくれました。昔、自分たちが聞いた昔話を思い出しながら、ときには歌のように調子よく、生き生きと、そしてやさしく話してくれました。おじいさんやおばあさんが方言で、私たち三人だけに話してくれた昔話は、本に載っているのは大違いで、民話や昔話ではなく、本当に『ざっとむかし』そのままという感じがしました。おじいさんやおばあさんの話を聞いているとき、日文研の民話分科会に入って、本当によかったと思いました。このようにすばらしい昔話が消えつつあるのは本当に残念なことです。

村のどの家を訪ねてもたいてい都会と同じようにカラーテレビがドカッとあるし、立派ないろりがあっても、もうだいぶ前から使わなくなっています。それにステキな新しい家も建っていたし・・・

やはり、昔話を子供たちがせがんで、夜、おじいちゃん、おばあちゃんに聞かせてもらったなんていうのは、むかし

むかしのことなんだなあと感じました。だから、このように昔話が消えつつあるのは、もうどうしようもないことだから、知っているお年寄りから、残っている昔話を一つでも多く聞きだしておきたいと思いました。そして、大変に残念だったのは、百歳になるおばあちゃんに話を聞けなかったことです。村の人みんなが、

「あのおばあさんならたくさん知っているよ」

と言っていたのに、耳が遠く、また疲れていらつしやるようで、一つも話を聞くことができなかったのです。あと、二、三年も早く来ていたら、聞くことができたでしょうに。昔話をたくさん知っていらただけに残念でなりませんでした。

それから昔話とは直接関係ないのですが、感激したのは村の人たちのあたたかさです。私はずっと東京生まれの東京育ちのせいかな、村の人たちの言葉や対応がとてもうれしく感じられました。

「話ができないけれど、あがって休んでいきなさい」

とか、

「まあ、ありがたい」

とか、

「またいらっしやい。こんど思い出しておくから」

などと方言でやさしく言われた言葉は、今でも心に残っています。

今度の合宿は、先輩たちが前に行った合宿より、昔話がたくさん聞けなかったけれど、お盆の話、お手玉唄、早乙女踊りなどを聞くこともできたし、それに村の人たちのあたたかい心に直にふれることができたので、私にとっては、とてもすばらしい合宿でした。

民話について思うこと

滝川陽子

こんなお話がありました。

旅の途中で道連れになった男二人。一人は金もうけの上手な男。もう一人はなんのとりえもない男。ある日、金もうけの上手な男がいつもの通り仕事を終えて昼寝をしていた。するとその男の鼻の中から一匹の蜂が飛び出し、どこかへ飛んでいったかと思うと、しばらくしてまた戻ってきて、その男の鼻の中へ入りました。それを見ていたもう一人の男が、びつくりしてそのことを告げますと、彼は、たくさんの金銀のあるところへ行った夢をみたと言いました。それでもう一人の男がそのことを信じてその場所を探してみると、本当に金銀がたくさんある所を見つけました。そんなわけで、なんのとりえもなかった男は大金持ちになったという事です。めでたし、めでたしです。

どうしてでしょうか。民話には、お金持ちになって一生を安楽に過ごしたという話が多いのです。民話というもの

は、虐げられた民衆の願望のあらわれでしょうか。休む間もなく働いた人達にとっては、このような話が何よりの話であり、慰めであったのでしょうか。

民話には、まとまった芸術性というものはないかもしれませんが。けれども私達をひきつける何かがあります。それが民話のもつ素朴さともいうのでしょうか。

夜、いろりを囲んで、あるいは寢床で、おじいさん、おばあさんの話を聞きながら、寝入った子供たち。そんな話を通じて昔の子供たちは道徳というものを学んでいったのではないかと思えます。

私が民話と言うものを知ったのは、五つぐらいのときだったかしら。でもそれはおばあさんから聞いたのではなく、絵本からでした。そのせいか、実際の話とは、多少違っていったようです。民話の中には残酷だなと思う話もいくつもあります。でも、それなりに子供たちはまた、その中から正義というものを身につけていったのではないかしら。今の絵本には、心ある人たちのために、それが軽減されているよ

うです。それが子供たちにとっていいのかは、今の私にはまだよくわかっていません。

福島の中の山に行つて、実際に民話を聞いてきたということは、やはり絵本にない何かをその中に見つけたと私は思うのです。

サークルに入つて

雨宮さとみ

もうすぐ十一月です。

今頃になつて、ホームシックなのでしょうか。ひたすらひたすら・・・「家に帰りた〜い！」

私の家は田舎で、二十分足らずの所に、さほど高くはないけれど、山があります。春は柔らかな若葉に包まれて見ているだけで幸せになってしまうような山で、小さな頃から、近所の友達と、つつじや山百合を集めて遊んだりした

ものです。

もう少し経つと、木の葉も色づいて、いろんな色の木の実でいっぱいになります。・・・遊びに行きたいナ・・・

ところで私はこのサークルに入ってから、まだ一ヶ月経ていないのですが、みんなとても忙しそうで生き生きして、部室に入った途端に楽しくなっています。

初めて部室に来た日のトランプやら雑談やらの騒ぎに、まず驚き、部会ときのまじめな顔に再び驚き・・・

でも、今はなんとなく慣れて、

「忙しい、忙しい」

とか言いながらも、喜んで部室に来ます。

学園祭まであと三日。

今日は徹夜するのだとか・・・

何にしても、学園祭が楽しみです。

それが終わったら家にも帰れそうだし。今は、出来るだけ学園祭の準備にがんばろう！

日文研民話分科会と私

永井英男

【はじめに】

民話（昔話・伝説）なるものに首をつっこんでから、早や一年半。学校の勉強のかたわら、そしてみんなとの付き合いのかたわら、民話集などを紐解いてみたり、仲間と討論したりして、少しずつそれらしきものをかじって来た。私の大学生活の前半の大部分を占めるこの道楽は、初めのうちは、ただ何となく始めたものだったが、私にとっては無視できないものとなって来た。しかし、私にはもうこの種の道楽にさくための時間が残り少なくなってきたように思う。この辺で、ここ一年余りの私の道楽の総決算をするときが来たようだ。

私達のサークルの特徴として、日文研の研究面でプロになろうという人が、ほとんどいないことがあげられる。東京の大学のある研究会のように専門の研究者になろうというわけでもないし、入部の動機も、民話に興味を抱いて来

る者もいれば、組織活動の音頭をとるためという人もいる。学校の受身の授業の味気なさを補うためという人もいる。また、これが一番困るのであるが、ただ何となく友人に誘われて入って来たという者もいる。

卒業後も概して教職につこうとしている人が多いが、工業・商業系に活躍の舞台を持つようとしている人達もいる。

このような中であって、民話の研究は必然的に「アマ的」にならざるを得ない。各人の教養常識を広げるための便宜上の手段となっている。あるいは、ひじょうに残念なことだが、部員の中には研究など眼中に置かずに、遊び友達を見つけないでいるだけの者もいるかもしれない。

私は工学部の機械工学科に籍をおき、将来は工業界で食べていこうと心密かに願っている一人である。したがって、私にとっての民話研究は、本職の人の民話研究とはその目標が異なり社会に対する見識を広め、私の後々の生活で、常識の欠落による重大なミスを犯さないようにするための一つの方便となっている。

このような意味で、この文章は、私の日文研における個人的な研究面の、一つの区切りとして書かれたものである。

#### 【研究目標―民話】

私はなぜ民話を研究対象に選んだのだろうか。

実を言うと、この仕事に取りかかるのは、私にとってたいへん大きな不安が伴っていた。なぜならば、私はこの仕事に入る前までは、国語の教科が不得意であったからである。私は工学部を志望し、興味も得意とする所も理数系に傾いていた。小説をじつと読み、詩や文章を書く時間よりも、数学や物理、化学に接している時間の方がはるかに長かった。日本語で文章を書くことに一種の恐怖さえ感じていた。ところが実際に文章を書かねばならない機会は、日に増えてくる。私は何とかまともな文章を書くために、適当な訓練をほどこす必要に迫られていた。日本文化研究会で民話を扱うことは、そのための一つの手段を提供するものと考えた。民話は口承文芸であるから、ことばによってその大部分が表現される。特に文字化してしまうとすべ

てが文章になり、それを理解できることが民話に接する前提条件であった。すなわち、民話をやっていくと、いやでも文章と仲良くならねばならず、これは、私の言語能力の増大に少なからず貢献してくれるもののように思えたのであった。

このような理由以外に、民話は民衆が作りあげ、民衆に長い間支持されてきたものであるという点が不思議でならなかったことがあげられる。民話には一作家の創作とは異なり、社会の底辺で生きてきた人達の心の叫びが含まれ、生活の知恵のようなものがあると感じたのだった。

確かに民話には「あとかくしの雪」のように、人情を感じさせる心温まる話もあるかと思えば、「化物寺」のような残酷きわまりない話もある。実に民衆の生きた姿が、民話の中に形を変えて投影されているように思えた。私には、民話の中からどれだけその叫びを読み取ることができるか疑問だったが、私が民話にかじりついた動機の一つには、そのような日本人の大多数に支持された共通した何かを、垣

間見たいという願いがあった。

また、民話とその周辺の民俗に手をつけることは、各地を旅行する際に、その土地に住んでいる人々の暮らしを知る上で、一つの手掛かりを与えてくれるように思えた。旅行にもいろいろなタイプがあるが、私は土地の自然景観や、旧所名跡だけでなく、その土地を基盤にして生計を立てている人々に関心があった。ごく平凡な暮らしの中に、私にとって役立ちそうなものがころがっているように思えた。土地の人と、その土地の暮らしについての話題を持ちたいという願いが、私を民話に接近させる一つの原動力になったと言つてよい。

#### 【昭和四十八年夏合宿】

去年の夏合宿は、民俗採訪という点では、私は初めてではなかったが、これまでは私の家の近くの埼玉県内しか行つたことがなかったのに対し、気候風土や生活様式の異なる遠隔地に出向いたという点では初めての経験だった。

このとき、一番困つたのが方言の問題である。こちらは、

自分の生まれ育った所をめぐったに出たことがなかったの、突然、東北弁の世界の中にほうり込まれることになってしまった。初めのうちは相手の言っていることがよくわからず、とても調査どころではなかった。あらかじめ土地の言葉で書かれた昔話集に目を通して行ったのであるが、会話となると全く面食らってしまった。しかし、身振りや手振り、話の展開のしかたなどから少しずつ言葉を覚えるようになったので、合宿の終わり頃には、一通りの意味はとれるようになったかと思う。テレビやラジオなどの影響で標準語がだいぶ入り込んでおり、その点でもいくらか助かったのかもしれない。

合宿では、一応昔話が目的だったが、採訪中に村の人と話していて、まさか昔話のことだけしか話さないわけにもいかず、その他の話題にも注意を払った。しかしながら、自分、相手はこちらとは相当年齢の離れた人であり、かつまた、初対面でもあったので、社会体験の少ない私などは、緊張のあまりヒザがガクガクとまではいかなくとも、話題を

途切らせまいとしどろもどろだったことを思い出す。

村の人は都会では信じられない程親切で、門前払いを食わされたことはあまりなかった。昔話を語ることはできないが、「マア、アガラッシエ」と座を勧められて、こちらは大変恐縮した。そんな席で、村のいろいろな苦労話や生活の話の聞いたり、わらぶき屋根の家の中を見せてもらった、イロリを拝見したり、土地の珍しい食物を賞味したりしたのは、私だけでなく、他のメンバーも同様に楽しかったことだろう。納豆もち、わらび、ぜんまいなどの山菜、自家製の味噌で作った味噌汁など、一年たった今でも懐かしく思い出す。

#### 【昭和四十九年春合宿】

春合宿では、まず、うわきには聞いていたが、その豪雪には驚いた。見渡す限りの田畑がすっかり雪におおわれ、(と言つても、土は雪の下で、田だか畑だか表面上は区別出来ないのだが・・・)家々も白い雪帽子をかぶって、ひっそりと静まり返っている。家の中には大きな空間の真中にこた

つがあり、家の人が何やらおしゃべりをしている。ある家では、土間でおじいさんがワラの三角のワクを編んでいた。蚕に繭を作らせるのに使い、マブシと言うそうである。

この合宿では、すばらしい昔話の話者にめぐり会った。

伊南村浜野部落の羽染<sup>はぞめ</sup>ハナさんだ。ハナさんがよく話を知っていると、浜野に初めて足を運んだとき、すでに聞いていた。そこでその日の帰りがけに役場に寄ったところ、役場の人からハナさんに電話を入れてくれた。電話口でハナさんが言うには、

「私は、子供の頃からムカシを聞くのが好きで、今でも孫に語って聞かせることがある。そして今まで憶えた昔話をこのまま記録に残しておかないのは残念で、いつか本にしようと思っていたが、その機会がないままできた。ここで、あなたがたが私の憶えている話を本にしてくれるなら、こんな有難いことはない。翌日、是非来てくれるように」とのことだった。

実際に会ってみると、とても話し好きで、何より驚いた

ことに、このような山間の僻地に住み、失礼ながらあえて言わせてもらえば、普通の老人としか思えないハナさんの口から、人生の何たるかを知らされた思いをしたことだった。ハナさんは尊敬する人物として『小林大二』という人をあげ、さかんにその偉さを説いていた。私のわずかな経験から、尊敬する人物を持っている人は強い人だと思っていたが、ここでもまた、その具体例を見た思いだった。このことを後に、日文研顧問の川端豊彦先生に話したところ、田舎だからそういう偉い人がいるのだと言われてしまった。そうかもしれない。

その日はハナさんの知っている昔話の全部を聞くことができなかったが、時間も遅く、宿舎に帰らねばならなかった。翌日、予定を延ばしてさらに残りの話を聞いた。ハナさんは、結局五十話近く語ってくれた。

#### 【昭和四十九年夏合宿】

今年の夏合宿は事前準備が不十分で、しかも合宿期間中に宿泊施設の近くで不慮の火災などがあって、調査の初期

の目標を達成できたとは言えないが、今回も、都会と田舎の生活の差異を感じた。前述したが、住んでいる人の感覚が都会とはまるで違う。例えば、こちらで昼食に弁当を用意しても、ほとんどその必要がなく、向こうの家で私達の知らない間に昼食の用意をしてくれたり、私達の矢のような質問にも面倒がらずに答えてくれたり、自分がこちらの知りたい昔話を知らなければ、それを知っている人のところまで連れて行ってくれたりした。またあるときは、トマトの出荷準備の手を休めて、私達と会ってくれたりもした。伊南村浜野の河原田さんの家では、昼食を御馳走になったあげく、フキやワラビの塩漬けをお土産にいただき、たいへん有難く思った。また、去年の夏の話だが、おじいさんが自分で作ったという、ゲンベエワラジをいただいた。こんな例は私だけでなく、仲間の間でも枚挙にいとまがない。私としては考えさせられることであった。

#### 【おわりに】

まだまだ書きたいことは山ほどあるが、紙面の都合もあ

り、このあたりでやめなければならない。ここに書いたものは全活動のほんの一部にすぎない。

日文研で合宿に行ったり、本を読んだり、みんなと話し合う中で、私が一番強く思い知らされたのは、自分がいかに物事を知らないかということであった。

合宿調査で、様々なことを聞いたり見たりして来たが、新しい事実を知れば知るほど、その奥に膨大な量の生々しい事実が潜んでいることを知らされ、唾然とすることもしばしばだった。米国のアポロ計画が成功し、月の石が持ち帰られて、科学者達が長年解けずにいた月の謎が、これで解決するかと思えば、そうではなく、かえってわからないことが増えてしまったという話を聞いたことがある。私が合宿で受けた印象も、それに似ていた。

また、去年の夏に作った昔話集を話者の方々に送り、翌年同じお宅に伺ったとき、その家の人が、

「この前の本を孫に語って聞かせると、孫がとても喜ぶんですよ」

と言っていたという。社会に対して何らかの働きかけをする結果になったことを知ったとき、私はその本の作成に携わった者として、ある種の責任感を感じざるを得なかった。

最後に、私達の活動に際し、温かな援助と便宜を図ってくださった多くの方々にお礼を申し上げなければならぬ。私達が一年半の間、民話に接していられたのも、これらの人々のおかげである。時に合宿調査に際し、終始研究上の助言を与えてくださった会津民俗研究会の安藤紫香氏や、日文研の顧問である川端豊彦教授には、大変お世話になった。安藤氏には、たび重なる問い合わせに快く応じていただき、今年の夏には、合宿の夕食会で土地の珍しいお話をしていただくなど、私達には身に余る光栄であった。川端先生は、去年の夏合宿に南郷村が決定したとき、村の教育委員会に私達の会の紹介状を出して下さったり、資料のまとめ方を教えていただいたりした。私達の作った民話集のために序文を書いてくださったりして、私達の会の顧問という理由だけで、いろいろな貴重な時間をさいてくださ

った。

三回にわたる合宿期間中、宿舎の公民館で私達の生活の面倒を見、御迷惑をおかけした赤塚敏夫さんにも感謝しなくてはならない。赤塚さんは、私達の合宿生活の一切のことに気を配られ、事故のないように常に心を砕いてくださった。村の話者の方々にもお礼申し上げなくてはならない。日中の忙しい最中、突然訪問したにもかかわらず、私達の願いを聞いてくださったり、様々なことを教えてくださったりした。

このように、私達の活動は単に私達の力のみで成り立っているものではなく、私達をとりまく数多くの人々や機関の援助があつてこそである。

またこの文章を書くにあたり、日文研の仲間には人並みならぬ動機をいただいた。ここに紙上を借りて、厚く感謝の意を表す次第である。

南郷村及び伊南村での民話採集調査も今回で三回目ですが、無事終えることができました。私は残念ながら今回の合宿には参加することができませんでしたが、今までの状況からの感想は、昔話や伝説は、やはり、その語り手を共に失い、消えつつあることでした。

遠い昔から語り継がれてきた昔話、伝説等は、長い間人々の娯楽、団らんであり、なぐさめでもあったでしょうし、民俗学上からも昔の人々の考え方、生活状態などその他様々な事柄を得ることができます。しかし、このような学問的メリットとは関係なく考えるとき、子供達がどんなに昔話などを喜んでいるか、ということに気づきます。ただ、この場合、おじいさんおばあさんから直接聞くという形よりも、本などで読むことの方が多くなっているのでしょうか・・・

昔話の特徴とも言うべき奇想天外さや不思議さは、大人からみると矛盾に満ちおかしいものでも、子供にとっては、

それは矛盾でも何でもなく、ごく当たり前のこととして受け入れられるもののだと思います。従って、昔話は本来が大人同士の所有であったものが、その位置を失って、子供の話として受け入れられるのも当然の成り行きだと思います。もちろん、笑い話の類などには、その位置を変えないものもありますが・・・

思いつくままに書いて見ましたので要領を得ない文になってしまいました。ただ私は、昔話はその形を変えられても伝えられ、また、新しい昔話が時代と共に作られ、伝えられていくのだろう、また、そうあつて欲しいと考えているのです。ただ消え去ってしまうものとしては、昔話はいまにも私達日本人の中に根を張っているような気がしません。例えば、

「どんぶりが、どんぶりが・・・」

と聞けば、誰もがおそらく、それが桃太郎の話の中のものだということは、すぐにわかると思います。このような言葉は翻訳不可能なものだそうです。私達日本人が、マザー・

グースの唄の一節を見ても、直接それが歌われるのを聞かない限り、あるいは聞いても実感として受け入れられないのと同様なものでしょう。多分に感傷的な極論となつてしまいました。以上、民話採集調査を終えての、さしあたっての感想です。

合宿を終えて

広田真理子

南郷村合宿も今回で三回を数えた。もうすっかり村の様子もわかり、もちろん採訪が目的ではあるが、それとは別に、なつかしい「ふるさと」へ帰るといふ気持ちに、いつしかなつていた。採訪地域も、南郷村から伊南村、館岩村と広がるにつれて、ゆつくりでないとよくわからなかった言葉もわかるようになってきた。

私たちが三度も南郷村を訪れたのは、研究に必要な条件

をたくさん備えていたということはもちろんであるが、私たちが迎えてくれた村の人たちの「あたたかさ」があったからである。村の人たちのあたたかさにふれたり、「ざつとむかし」を語ってきかせてもらったとき、

「あー、訪ねてよかった」

と思う。やはり、直接に訪ねて語ってもらい、そこに、「あたたかさ」を感じたときにこそ、「民話」は生きてくるのである。それだけに、とても残念に思うことがある。訪ねていくと、

「あー、〇〇のばんばがよく知ってやったが・・・(ここで目を輝かせる)今はもういねえ。△年前に死にやっただ」  
(ガックリ)

と言われたことが何度かある。

民話は口承文芸である。伝承者がいなければそれで終わりである。また、伝承者が覚えていなければ・・・

「小さい頃聞いた覚えがあるが・・・」

とか、

「最近は何も語っていないからすっかり忘れてしまった」

という言葉をよく聞いた。無理のないことだと思う。なんとか思い出そうとしてくれるのであるが・・・むしろ、はっきり覚えていない人に出会うと、驚き感心してしまう。

このような状況の中で、私たちはどのように「民話」を採集し、伝えていけたらよいのであろうか。

また、最近「民話ブーム」とかといって、書店には、たくさん民話の本が並んでいる。聞いて楽しむという形から、読んで楽しむという形に変わってきている。しかし、どんなに立派な本を読んでも、どんなにたくさん話を読んでも、直接に語ってもらって聞いたことには及ばない。が、誰もが直接に聞くことができるわけではない。直接に聞いた私たちが語ることができればよいのであるが・・・むしろ、難しいことであり、無理がある。

無理のない範囲で、採集してきた話をどのようにして、正確に、ありのままに伝えていけたらよいのか。

これからの大きな課題である。

採訪初日

深野弘美

村には、美しい藁葺屋根の民家が多い。曲家で、牛を飼っている。きれいに切り揃えられた軒の曲線が美しく、板壁のこげ茶色に、真白な漆喰がよく映える。その中を細々とした道が続いている。

「さあ、これから採訪だ」

しかし、知らない者が突然たずねて行って、びっくりしないだろうか。変な目で見やしないかな。口をきいてくれるだろうか。昔話を實際語れる人がいるだろうか。見知らぬ土地で、見知らぬ人を訪ねて歩く不安で、勇んだ足も次第に遅くなってくる。

伊南村宮沢部落の入口に着く。神社に数人の人だけが、弓道の練習をしている。臆す私を尻目に、先輩が切り出す。

「私達、千葉大の者で、日本文化を研究しているんです。この神社はどういった・・・」

弓を持つ手を休めて、四、五人が一斉にこちらに向き直る。しばらく先輩が話した後、何か言えとの合図。動悸は高まり、しどろもどろの質問を二、三してみる。心配したほど、好奇の目ではない。少し気が休まる。その人達に、昔話を知っていそうな人を教えてもらい歩き出す。いよいよ各戸を訪ねるのである。

一、二軒回り、私の出番。

「ご免ください。あのう、私達、千葉大学の学生で、民話を集めているんですが・・・」

冷や汗が出る。

「何か御存知でしたら、お聞かせしていただきたいのですが・・・」

なんとか言えた。しかし相手は困ったような顔をして、

「民話？知らねえな」

の返事。そこで先輩の助け舟。

「でも、小さい頃、何かお聞きになった事はありませんか」

「わかんねえ。どうだかな」

「猿むかしなんて話、知りませんか」

「知んねえ。年寄りいねえものな」

しつこすぎない程度にねばるのは度胸が必要である。こはまずひき下がり、他へ回る。道々、あいさつの仕方が長すぎると注意される。長すぎては相手が、理解できないし、緊張して、思い出せるものもできなくなる。また、言葉がかった苦しいのもいけない。

「こんにちは。あの、私達、千葉から来たんです。昔話とか伝説とか集めているんですけど、何か御存知ないですか」少しはスムーズに言葉が出せるようになる。

「うちのばんば、体さ具合悪くて寝てやんだ。向こうの家のじいさんなら・・・」

と他を紹介される。残念だが、諦めて回ってみる。それにしても、どこの家もなかなか話してくれそうもない。昔話と限定するからいけないのかもと、村の生活を聞く事にする。

「こんにちは。私達、千葉大の学生なんですけど、この辺の事を少し伺いたいんですけど。今、お盆ですが、この辺りで

は特別な行事は何かありますか」

やはり、生活に関する事なら話しやすいせい、新盆の事、迎え火の事などを聞き、ついでに牛の話などでもしてもらう事ができた。しかし、肝心の昔話は出てこなかった。諦めてまた歩き出す。村でも昔話を語れる年寄りも、もう多くはない。テレビが、山奥の村々にも普及している現在、昔のように、いろいろ端で子どもらが昔語りを聞く事はないそうである。そして、かつては胸をときめかせたであろう昔話の数々は、今では、年寄り達の記憶の中にひっそりと眠っている。部落を歩いていても、あそこのばんば、じいさんが生きていたらという言葉を目にするにつけ、なんとも言えない無念さを味わう。

八月も半ば、太陽は容赦なく照りつけ、足も重くなってくる。採訪はまた体力と忍耐も必要とする。南郷むかしを一号・二号と発刊してきた先輩達に、今さらながら敬意を表し、黙々とほこり道を歩く。三十数戸の部落の大半を回り、最後に話し好きと評判されるおじいさんの家を訪ねた

頃は、日も傾きはじめていた。ここで初めて、念願の昔話をしてもらう事ができた。笠地藏である。一言一言、一句一句、含めるようなその語りに、「やはり来てよかった」と感じた。伝説や付近の歴史も聞き、家宝の刀まで見せてもらう事ができた。(テープレコーダ) テレコに無事、録音して帰るとき、見送ってくれたおじいさん、おばあさんの目が特に印象的だった。

帰り道、ふと気づくと、いつのまにか、採訪への不安や緊張がほぐれていた。

人と話すのはむずかしい。特に相手の眠った記憶を呼び起こしながら話さねばならない採訪は、自分自身、多くの勉強が必要である。例としてあげる話もいくつもあげられなかった私だったが、採訪初日はこうして無事、暮れた。消えつつある民話の灯を少しでも、私達の手で残す事ができたらと、明日への意欲のわいた一日だった。

今年春、川崎市多摩区<sup>すげ</sup>菅にある玉林寺という寺を訪れた。この菅に僕は小学校三年まで住んでいた。現在は埼玉の浦和に移転しているから、この寺を再び訪れたのが十二、十三年ぶりのことで、道がわからず、いっしょに付き合ってくれた幼友達に案内してもらった。山道といってもちっぼけな道だったが、この入口に松の木が一本ある。十年以上も経た現在もなおその場に元気に立っていた。

その寺のすぐ近くに神社がある。毎年秋になると、ここで天狗が出て来て、軍配を手に相撲を取る祭があった。僕が六歳ぐらいの頃、近所に住むヒカルちゃんという青年がこの天狗の面をかぶったのを覚えている。彼は運悪くかぜ熱でとても天狗の面をかぶれそうにもなかったのだが、池谷<sup>いけたに</sup>さん（医師）に注射してもらって、一晩中がんばったという話を思い出す。その場所に再び立ってみると、小さかった頃のイメージよりもずいぶん狭い神社に感じられた。

付近に住むおばさんに尋ねたら、今では一年おきぐらいにしかやらないとのことだった。

幼かった頃は、この天狗の祭の日がとても待遠しいものだった。赤い面をつけた天狗を見ることよりも、むしろ夜店の方に興味があつたのだろうと思うが、今になると懐かしい。

昨年は残念ながら、この祭を見る機会をもてなかったが、毎年秋になると、昔のあの天狗が出てくる祭のことが思い出される。不思議なものだ。遠くへ働きに行っている人たちが故郷の祭の日には必ず戻って来るとい話を聞くが、やはり血が騒ぐのだろう。

祭は日本ばかりではなく、各国でその地方の習慣にしたがって行われていることは言うまでもない。ブラジル・リオのカーニバル（ブラジル語の発音「カルナバル」）もそのひとつだろう。話によれば、地元のブラジル人達は、この日のために一年間せつせと働き、金をためるといふ。

住む所が違えば祭のときのご馳走も違うようだ。ブラジ

ルのサンパウロ在住の日系人達の間では、何かお祝い事や祭などがあると『子豚の丸焼き』なども食べるようだ。日本での祭やお祝い事するときには、まず出てこないだろう。ちよつと抵抗を感じてしまうと思う。ところが、この豚の丸焼きも習慣になると平気なようで、ある日、僕の友人からの手紙（サンパウロ在住の日系人）に、

「もうじきブタちゃんときよならします。今まで大切にしておいたけれど、丸焼きになります。この手紙がそちらにつく頃には、私のお腹の中に入っているでしょう・・・」

とあったのを思い出す。テーブルの上に乗せられたブタちゃんの顔をながめながら、我友人は、おいしそうに食らいついているのか？ たぶん僕がタコの酢づけなどを食べる場面を見たら、さぞふるえあがることだろう（外国人の中にはタコを魔物と思って食べない人がいると聞く）。

住む所が異なると習慣も異なる。何となくおもしろく、何となくわずらわしい。

僕が千葉大の日文研民話分科会に所属したのは入学したての四月のことだった。すでに一年半以上もここに籍を置いている。本当は民話よりも民俗行事の方に興味がある。現在も、高校の頃に入っていた民俗学研究会で身につけた探訪の方法を発揮して、ひとりであらりと出かけては、今まで自分の知らなかったようなものを見聞して歩いている。ここでは、その歩き回った結果の報告などをしながら自分の感想など述べてみたい。

#### 【山の神との出会い】

今年の夏、久しぶりに三日間ほど山歩きをした。秩父方面から雲取山く飛竜山を経て日本三大峠のひとつである雁坂峠へ出た。ちょうど高山植物の花が一面に咲いていて筆舌に尽くせないほどのすばらしい景色だった。

途中、笠取小屋に一泊したので、この御主人に山にまつわる伝説とか禁忌を聞こうと思ったけれど、御主人は、ウイスキーのサントリーホワイトをかかえてコップでガブガブという状態だった上、少々ご機嫌が悪く、残念ながら機

会をもてなかった。この御主人はこの辺ではちよつと名の知られた名物男なのだそうだ。

下山は山梨県の塩山えんざんということに決めていたので、峠から麓の山村（新地平）へおりた。ここで思いがけなくも『山の神』にばったり出会った。同行した弟は、そ知らぬふりして先を急ごうとしたが、僕の足はピタツと止まった。山の神に呼び止められたわけではないが、とても古風な形式の山の神の祠ほこだったのだ。沿道に面して直径一メートル以上もありそうな大木が立っており、その幹にぼっかり穴があいていた。その中に山の神がまつられているのだ。木のまわりには例によって縄がはってあり、『山の神』と書いた旗らしきものがかかっていた。『木にできた穴の中にまつる』これが本来の姿ではないのかな？と思った。

昨年、千葉市萩台に住む萩原さん（農家）宅の裏庭で、大木の根元にまつられている家敷神というのを見せていただいたことを思い出す。福島県南会津郡伊南村大桃部落に行つたときには、部落のはずれから六百メートル程歩いた沿

道わきに、稻荷神社のような形にまつられた山の神を見ることのできた。本当は川向こうにもひとつあるという話だったが、行かずじまいだった。この部落には一対の山の神があつたというわけだ。

この山の神についてであるが、どうも女性だという説が多い。「うちのカミさんは・・・」というように、山の神Ⅱ奥さんと使われてもいるだけに、何か関係が深いようである。

文献を見ると「山の神」はたいそう醜い顔の持ち主らしく、オコゼという醜い顔の魚を非常に喜ぶのだそうだ。その魚の顔を見て自分の顔に自信をつけるといふのだろうか。しかし、南郷村あずまの東部落（旧入小屋いりこや）の平野盛次郎さんは、ちよつと異なる話を聞かせてくださった。

「山仕事に出かけるとき、男は身なりをきちんとする習慣がある。あるとき、毎日髭ひげを剃そってきちんとした格好で山仕事へ行く夫を見て不審に思ったその男の奥さんは、知らぬように山へついで行った。岩の切り立った所を夫が登

り始めようとする、急に白衣を着た美しい女が、その夫の身体をささえてやるようにして落ちぬように助け始めたではないか。

「やっぱりそうだったのか！」

と考えた奥さんは、その白衣の女に向かってどなった。すると女はフツと消えた。そのとたん、夫は足を踏み外して落ちて死んでしまったと言う。

この話からすると、山の神は山仕事をする男達の命を助けているということがわかる。男達が安心して山で仕事ができるのは、この山の神のおかげなのだろう。南郷村の各地で、まだ山の神をまつる風習がある。板橋部落では二月と十一月に山の神の日がある。この日は、山で仕事をするなど言う。たぶん山の神の休日だから守っていてくれる神様がいないのだろう。

山の神は天狗（ここでは男性扱い）のことを言う話もある。また山姥（ここでは女性扱い）のことだとも言う。天狗が比較的、悪者という恐ろしい力（魔力）をもつもののように

に考えられているのとは違い、山姥の方は極悪人に思われている。昔話の中にもしばしば登場するが、いつも人間に悪さをしたり、ときには人間を食ってしまおうとする程の『野蛮姥』として出てくる（「南郷むかし」一〜二集）。

この天狗や山姥の話の歴史をたどると長くなるので深入りはしないが、

「もしも山の神が目に見える形（姿）で現れたならば、このような姿だろう」

と推測したのが天狗であり、山姥だったのかも知れない。雲取山登山の下山途中（新地平）で見た山の神は、その祠の中には実在しなかった。本来の山の神は、その姿を形で現そうとしないものだ。だから普通、山の神をまつる所では内部は空っぽなのだ。やたらに人形や写真が置かれてあるよりも、よりいっそう畏怖の念がわくだろうし、その方がより山の神らしいと思う。

#### 【和泉田の大蛇絵】

昨年の夏、合宿調査で南郷村和泉田部落を担当してまわ

ったとき、この部落に『大蛇絵』があるという話を聞いた。隣部落の下山でも、和泉田のへびの絵のことを部落の人が話してくれた。当時は民話採集が目的だったので、別に気をとめずに過ごしてしまった。

ところが、後に村で集録してきた録音テープの中に、この和泉田のへびの昔話（伝説に近い）が入っているのに気がついた。

「いったいどんな絵なのだろうか？」

実物を見たいという気になり出した。

運良く、今年の春、雪深い南郷村を訪れることができたので、和泉田でお世話になった五十嵐二平先生に電話をかけて都合をうかがったけれども、残念ながら先生が多忙のため、このときには絵を見ることができずじまいだった。話に聞くところによると、大きなへびが自分の産んだ子供（人間の子）を抱いている姿が描かれているということだった。

このへびの話は、『日本の昔話』柳田国男（著）に出てく

る『へびの玉』という話に酷似している。人間の姿に身を變えたへびが、ある男の妻となる。しばらくして子供が生まれることになったが、誰にも見られないように「見てはなりません」と忠告する。ところがその男はこの約束を犯して見てしまう。すると自分の妻はへびの身であった・・・という筋書きで続く話である。

この話どおりの絵が和泉田の、ある堂の中にかけてあるというのだ。絵が見たいと思って見る機会を失えば、益々その絵が見たくなる。

今年の夏、三度目の南郷入りができたので、すぐに五十嵐二平先生に電話して、今度はうまく機会を作ることができた。

その日、僕はカメラの準備をして、昨年いっしょに和泉田を担当した仲間と出かけた。先生は、古い資料などを集めて民俗関係の研究をしていらつしやる地元の小学校の元先生だった方なので、だいぶ勉強になる話などを聞かせてくださった。

例のへびの絵は、近くのお堂（薬師様）の中にあるということ、普段は錠がかけられている堂を特別に開けていたのだ。山ぎわに位置し、杉の大木で囲まれた堂の中は薄暗かったが、その目指す絵は額のがくのような形で梁の上にかかっていた。縦一メートル、横幅二〜三メートル程のもので、きれいな錦絵のような絵であった。絵の描き方は源氏絵巻物のようで、その左方に大蛇がいた。大蛇といっても「龍」

の姿に描いているものだった。そして、男がふすまの隙間からその大蛇を覗いて見ている。大蛇の頭には生まれたばかりの子供（人間の子供）が描かれている。絵のふちと下方は傷んでいて絵の全体の様子はわからなかったが、大蛇と男の姿ははっきりしていた。五十嵐先生も実物を見たのは初めてだとおっしゃっていたところを見ると、村の人達でもまだ見たことのない人が多いのだろうと思う。

こうして念願を果たしたわけだが、後日、この絵の写真は大きく引き伸ばされて、今、僕の部屋の梁にかけられている。

この大蛇絵の話は「明け六つ暮れ六つ」という題名で、本冊子に載せられているから参考にしてほしい。

三度の南郷村訪問を終えて

若林己千雄

昨年の中月中旬、上野発の夜行列車に乗り込んだ私達が会津若松に着いたのは、夏の夜もすっかり明けてしまった五時頃であったと思う。そこから会津線のディーゼル列車に揺られ、私は都会では感じることでできない朝の冷気に身を縮めながらも、窓外の山並みや川の流れに目を奪われていた。南下を続けた列車が会津田島駅に着いたのは、夏の太陽がまだ東の空低く、木々の間にまぶしくもやさしい光線を投げかけている時刻であったかと思う。東京では、まさに通勤ラッシュが始まろうとしている頃だろう。

私達は接続よくすぐにバスに乗った。そして今度降車す

る所こそ、彼の地に伝わる昔話を採集すべく合宿地に選んだ南郷村なのである。バスがそこに辿り着くまでには、途中駒止峠という山越えをしなければならないのではあるが、やがて人家が一つ二つと減って行き、ついに視界から消えたとき、バスは急勾配を登り始め、いよいよ駒止峠に入った。この峠の傾斜やカーブは日光の「いろは坂」などの比ではなく、その上、国道といえども未だに全面舗装が施されていないので、まさに私は運転手に一命を預けているという心持ちだった。しかし、口ほどには不安感はなく、私の目は窓から遠望される山々、その間に生ずる深い谷、かつ眼下に続く今通り抜けて来たばかりの坂道の薄茶色にうねった細かい線に魅せられていた。やがて下に見出していた景色が次第に上昇して、再び道と同じ高さになったとき、私達は南郷村に到着した。

南郷村へ通ずる道がこの他に二つ、つまり只見<sup>ただみ</sup>から来る道と、中山峠から入る道があることを私が知ったのは、後のことで、私達が今年三月に再び南郷村を訪れたとき、私

はこれらの道を通ることになる。

三月下旬。東京ではすでに新芽が芽吹き始め、コートを脱ごうとする頃である。駒止峠が積雪の為に交通止めされているということを知った私達は、上越線で向かうことにした。列車が北に進むにつれて、あたりに白いものが散らつき始め、それが周囲一面を白く埋め尽くす所まで来たときには、東京の三月下旬ではとても見ることでできない冬特有のどんよりと灰色に染まった重たそうな空に変わり、群馬・新潟の県境である清水トンネルを抜けたときには、私は初めて雪国の吹雪という様相を見るに至った。

更に雪は深くなり、只見線に乗って目の前に見たものは雪の壁だけであり、おそらくこのディーゼルは白く冷たい窪地の中を走っていたことになるのであろう。この夏、私が再度只見線に乗ったときに、全く違う線路に沿っているような錯覚を起こしたのは、この為だと思う。

寒さが苦手な私には、この雪が不安である一方、初めての雪国はすべてが目新しくもあった。南郷村は夏の記憶に

残る凹凸の起伏を全く平地にしたような、一面白くおおわ  
れた雪原に変貌しており、これだけでも雪国の厳しい冬が  
十分に察せられた。雪に埋もれていないのは、村全体を貫  
く伊南川ばかりであった。この伊南川を昨年夏に初めて見  
たとき、川のない街に育った私は、物珍しさもあつて川原  
に降りてみたが、私が知っている川とは全く異質の、まさ  
に水といえる清らかさに目を見張り、その冷たさを満喫し  
たものである。今、白い平原を真二つに裂いて銀色に輝い  
ているその流れは、なお一層冷たいであろうのに、不思議  
にも私は、雪に閉ざされた北国で唯一つ生きて活動してい  
るような生命の温かみを感じたのである。

今年も近年稀に見る豪雪と聞いた。屋根高く雪が積もり、  
氷柱が軒先に長く太く下がっている平屋が、夏には二階屋  
であるということが、雪国というものの実態をまるで知ら  
ない私には、そのことを如実に物語っているように思われ  
た。

しかし、この程度のことは別段豪雪の業ではなく、例年

のことなのかもしれない。一つ、首まですっぽりと雪に埋  
まり、頭巾を被った頭だけ白いおおいから逃れている地蔵  
様が印象的であった。

夏の旧盆。三月に訪れたときと同じコースを辿って再度  
南郷村へ。冬のとときは逆に、南郷に近づくほど、空はだん  
だんと青く塗られていく。やがて視界に入る伊南川。この  
澄んだ川を見ると南郷へ来たという実感がわくところをみ  
ると、この流れは、私にとって南郷の象徴とも言うべきも  
のなのであろう。

今回の主な調査地は伊南村・館岩村である。南郷からの  
途中、絶えず川のせせらぎが聞こえ、両側は緑の山が囲ん  
でいる。三つの村すべてに言えることであるが、いずれの  
部落に足を踏み入れても、私は落ち着いた感じを受ける。  
ここには都会のようなせせこましさがなく、所為であろうか。  
だが、ここにも徐々にはあるが、都会の波が押し寄せて  
いることは否めない。茅葺屋根の隣に新しいトタン屋根。  
耕耘機こううんきの横の自動車。屋根にはカラーテレビのアンテナ。

そして今や囲炉裏などを使用している家はなく、すべてこたつであった。一抹の寂しさも感ずるが、それは都会の雑踏に飽き飽きし、この地に住む人の立場になることを忘れていた一都会人の身勝手な悲哀であり、郷愁なのであろう。生活の便宜を計るならば、それらはむしろ当然のことであり、自動車に至っては、交通の便のよい都会などよりも、こういう地にこそ必要なものではなからうか。しかし、私のわがままな郷愁は、各家に一步入った途端に完全に満たされるのである。

私達はこの地へ民話（昔話）と呼ばれるものを求めてやって来た。視覚からではなく、聴覚から、換言すれば書物に載っている民話ではなく、実際に話者が語るのを聞きたくて。私も例外にもれず、初めての訪問のときには、果たして気持ちよく家に迎え入れてくれるであろうかとか、うまく昔話を聞き出すことができるだろうかとか不安であった。後者に関しては、私の未熟さからの不手際もあり、必ずしも満足できたというものではなかったかもしれないが、前

者は、実際に家を訪れて全く懸念にすぎなかったということがすぐにわかった。それ程に村人たちは、見ず知らずの私達に対しても親切であった。

この村には、世間一般で問題となっている親子の断絶とか核家族化ということについては無縁であるように思われる。村全体がすっぽりと雪に閉ざされた南郷の冬は、見た目にはいかにも寒々としている。だが、各部落に点々としている厚く冷たい雪を被った屋根の下には、心温まる灯がこうこうと輝いていたのである。

民話というものは、一口に言えば、祖父母から孫への伝承の繰り返しで今日に至っている。その伝統が現在消滅しつつあるということは、テレビなどの普及により、昔話りの機会がなくなっているということが最も大きな原因かと思われるが、温かな家庭というものが失われつつあるということにも一因があるのであるかと思われる。何故なら南郷・伊南・館岩の村々には、今だ話者が存在するからであり、そこでは私達は、家庭の温かさを身をもって感じるこ

とができたからである。

私達は、数多くの民話を聞かせてもらって戻った。そして今や三冊目の「南郷むかし」を作ろうとしている。前二冊を振り返ったとき、私達は採集して来た話を一冊の本にまとめただけで自己満足視しているくらいがある。今の子供達がどんなにテレビっ子とは言っても、子供特有の夢の世界に懂れる意識は潜在的に持っているよう。

現に今、テレビで子供達に人気のある番組を見てみると、ウルトラマンにしろ、仮面ライダーにしろ、全て実際には起こり得ない架空の夢物語であり、弱い者を迫害する悪者を懲らしめる所は、昔話とよく似ていてはいないか。子供達が昔話を嫌う筈はない。もし私達が民話を文字にして残すことももちろん大切ではあるが、それ以上に自分達が話者となり下の世代に積極的に伝えていくように努力すべきではなからうか。民話の本質から言っても。

民話採訪の途中で（久川城址を歩く） 編集担当

伊南村の古町から大銀杏のわきをぬけ、釣り人の姿の見える伊南川を渡ると、小塩の部落に入る。ここから宮沢部落まで歩いて約二十分の道のりだ。この道の山側には久川城の跡がある。この城は今から八〇〇年近く前、河原田盛光が建てたものである。

当時、この土地の土豪であった河原田氏は、東北を中心におこった、前九年、後三年の役に参画し、手柄をたてたことによつて、田島の長沼、只見の山内、若松の葦名とともに、会津四名家としてこの南会津地方を四分した。

この南郷・伊南地方は、中央を流れる伊南川の豊穰な平野に恵まれ、古くから先人が住居していた。このあたりに縄文・弥生の遺跡が広く分布している。穀類の生産も古くから盛んで、戦国末期には雑穀を含めてではあるが、五万四千石という石高であった。

この河原田氏は天正一七年（一五八九年）伊達政宗の会

津攻略にあい、善戦及ばずその前に屈した。南会津地方の中心地として、一時は相当の人口を集めていた古町も、河原田氏が久川城を失ってからというもの、一向に振るわず、今ではその南にある山口が、この谷の中心となっている。

伊達の会津攻略の後も生き延びた河原田氏は、久川城のあった小山の麓の宮沢部落に、そしてその臣下であった人々も谷のあちこちに系図を残している。

## 民話分科会・活動記録

一九七四（昭和四十九）年

### 【四月】

○民話分科会メンバー十一名に新メンバー九名が加わり、これからの活動について話し合う。

○春合宿で集めた民話録音テープを文字に直す翻字作業と、「南郷むかし」第二集の準備を始める。

### 【五月】

○新メンバーのために春合宿の中から題材をとり、春合宿の班ごとに発表し、学習会を実施。

・四班（藤川・猪野）

天狗にさらわれた福太郎・さるむかし

・二班（広田・鈴木）

笠地蔵・動物譚（動物だけ出てくる話）

・三班（中島・若林）

妖怪の話・天狗の話

・五班（磯前・小栗）

舌切り雀・河童

・一班（永井・清水）

継子ままこばなし・仇討ちの話

○今年の夏合宿について話し合う。

場所は福島県南郷村・伊南村・舘岩村に決定。

（去年の夏、今年の春合宿について三度目）

### 【六月】

○夏合宿チーム編成決定

○へびについての学習会を始める。

『日本の昔話』柳田国男著の「蛇の息子」「姥皮」

「蛇の玉」などについて検討する。

### 【七月】

○民話集「南郷むかし」第二集の完成。

○夏合宿の準備にはいる。

【八月】

○八月十四日

磯前（責任者）以下民話分科会の十八名と「文化と私」分科会三名が南郷村入り。

○八月十五～十六日

各班ごとに採集に出かける。

○八月十七日

宿泊場所近隣火災のため採訪中止。自由行動日とした。

○八月十八日

予定を変更して、新たな班編成で採訪調査に出かける。

○八月十九日

春合宿のときに訪れた家へお礼にまわる。

○八月二十日

採訪調査を終えて南郷村を出発。

【九月】

○夏合宿の反省と大学祭について

合宿のまとめに主眼をおく。

大学祭用パンフレット作成班・スライド作成

班・パネル作成の班を決める。

【十月】

○夏合宿で採集してきたテープの翻字始める。

○大学祭の準備

【十一月】

○大学祭で、南郷村・伊南村・舘岩村の民話について、スライドフィルムの映像とナレーションによる研究発表とパネル展示をおこなう。

民話採話調査担当者（一九七四年八月で記入）

秋山美春 （四年）教育学部  
鈴木雅夫 （四年）工学部  
中島玲子 （四年）人文学部  
磯前礼子 （三年）教育学部  
広田真理子 （三年）教育学部  
猪野明江 （二年）教育学部  
小栗幸宣 （二年）工学部  
菊地美恵子 （二年）教育学部  
椎崎 洋 （二年）人文学部  
清水公子 （二年）教育学部

滝川陽子 （二年）教育学部  
永井英男 （二年）工学部  
藤川 誠 （二年）工学部  
若林己千雄 （二年）人文学部 分科会責任者  
雨宮さとみ （二年）教育学部  
竹谷寿々代 （二年）教育学部  
津田奈都子 （二年）教育学部  
深野弘美 （二年）教育学部

ほか三名

『ぎつとむかし(第二集)』

(福島県南会津郡南郷村の民話)

(福島県南会津郡伊南村の民話)

(福島県南会津郡舘岩村の民話)

【発行者】 千葉大学日本文化研究会民話分科会

【発行責任者】 若林己千雄

【発行日】 一九七四(昭和四九)年十一月一日

リポジトリ公開用覆刻版

『ぎつとむかし(第二集)』

(福島県南会津郡南郷村の民話)

(福島県南会津郡伊南村の民話)

(福島県南会津郡舘岩村の民話)

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧) 日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】 二〇二〇年三月三日

<https://doi.org/10.20776/106353>